

# 益田市の中山間地域における ICTを活用した持続可能な地域運営の モデル構築の実証実験 成果報告会

地域自治組織の支援にクラウドを導入。  
行政と住民のチームづくりに挑戦。

2016年7月1日より、島根県益田市・一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所・サイボウズ株式会社は協定を結び、クラウドを活用した自治組織づくりの実証実験を開始しました。

平成30年

# 3/10 [土]

## プログラム (予定)

- (1) あいさつ 益田市市長 山本浩章
- (2) イントロダクション (映像)
- (3) 事例報告
  - ① 住民による鳥獣被害対策の現在  
[益田市二条地区 二条里づくりの会]
  - ② 地域住民による保育所への農産物出荷  
[益田市真砂地区 真砂の食と農を守る会 大地]
  - ③ 訪問ケアにクラウドを試験活用  
[医療法人 里山会 / 匹見歯科診療所]
  - ④ 災害対策本部での活用を目指して  
[益田市役所 危機管理課]
  - ⑤ 地区補助金の会計事務負担をクラウドで軽減  
[他自治体よりゲスト事例報告：島根県邑南町 定住促進課]
- (4) 情報交換会  
実際の画面を展示しながら情報交換を行います。  
参加者からの疑問・質問にも、できる限りおこたえします。
- (5) トークセッション [会場参加型]  
地域づくりクラウド活用をふりかえる  
～取り組みから見えてきた成果と障壁～
- (6) 終わりのあいさつ

時間 13:30 ~ 16:30  
[開場 12:30 ~]

場所 益田市民学習センター 多目的ホール  
(島根県益田市元町 11-26)

— 本イベントの最新情報は下記のページにてご案内しています —

<https://masuda20180310.globa.com>

主催：  益田市

 一般社団法人  
小さな拠点ネットワーク研究所

 サイボウズ

お問い合わせ： 益田市役所 人口拡大課 地域づくり支援係 [TEL.0856-31-0600]



クラウドを活用した二条地区の鳥獣対策 <b>主催者紹介・イントロダクション</b>	P 4
クラウドを活用した真砂地区の農産物出荷 <b>地域住民による保育所への農産物出荷</b>	P 1 0
クラウドを活用した匹見町の地域包括ケア <b>訪問ケアにクラウドを試験活用</b>	P 1 4
クラウドを活用した益田市の防災・減災 <b>災害対策本部での活用を目指して</b>	P 1 8
クラウドを活用した <b>その他の事例</b>	P 2 2
[ 他自治体からのゲスト事例報告 ] クラウドを活用した邑南町の協働の仕組み <b>地区補助金の会計事務負担をクラウドで軽減</b>	P 2 4
トークセッション <b>取り組みの「成果」と「壁」を探る</b>	P 2 8
<b>キントーン連携サービスの実践について</b>	P 3 8

島根県

 益田市

人口：47,438 人  
世帯数：21,459  
(平成 30 年 2 月末時点)



益田市は、平成 26 年 2 月に「人口拡大計画」を策定し、「①子育て世代に手厚く！ ②Uターン大歓迎！ ③中山間地域を元気に！」を切り口に、人口拡大へ果敢に挑戦しています。平成 27 年 10 月には「人口拡大計画」を基礎に置き、これをさらに発展させ、「①定住の基盤となるしごとをつくる②結婚・出産・子育ての希望をかなえる③益田に回帰・流入・定着するひとのながれをつくる④地域にあるものを活かし、安心して暮らせるまちをつくる」の 4 つの基本目標と、「ひとが育つまち益田」の実現を目指し、人材育成のための協働体制の構築を組み込んだ益田市総合戦略を策定しています。

この度の取組みは、地域に住み続けるための定住条件を整備するため、地域住民と市が協働しながら地域をつくり上げていく取組みです。地域住民が主体となり地域課題を解決できるチームづくりは、日本の中山間地域の協働自立モデルの必須条件と考えています。

 一般社団法人  
小さな拠点ネットワーク研究所

人口減少がすすむ日本において、コミュニティや地域社会の新たな運営方法を実証研究すべく 2016 年に設立しました。島根県、広島県や岡山県など、中国地方を活動拠点にし、地域づくり案件や、大学との共同調査案件を行っています。提案だけに終わらず、地域住民と共に試行を繰り返すことで、現場の手ごたえを大切にしながら事業を展開しています。

所在地：島根県邑智郡邑南町  
代表理事：白石絢也

 サイボウズ

「チームワークあふれる社会をつくる」を企業理念におき、1997 年の創業以来、一貫して組織のチームワーク向上を支援するツールを開発・販売を手がけています。今回益田市での実証実験で導入された「kintone」は、プログラミング知識がなくても業務に必要なアプリを開発できる、業務用のアプリ構築プラットフォームです。サイボウズは 2011 年より kintone の提供を開始し、現在、8,000 社を超える企業が利用しています。

本実証実験について

[ 実証実験を行う背景 ]

人口減少による自治運営の担い手不足が課題に

島根県益田市は「日本創成会議」から発表された「消滅可能性都市」の1つです。1985年から人口減少が進み、農業の担い手不足による不耕作地の増加、管理しきれていない山林や里山の荒廃がもたらす鳥獣被害増加、空き家の増加などの課題が、近年散見されてきました。

そこで2013年より、地域が一体となり課題解決に向けて取り組む地域自治組織の設立ならびに運営の支援を進めてきました。この取り組みが順調に進んだ地域では、活動が拡大した結果、自治組織の事務局スタッフや、行政が配置したサポートスタッフへの負荷が大きくなっていました。

益田市は、人口拡大に向けて定住施策に力を入れておりますが、自治運営の担い手不足は、今後も恒常的な課題になると考えています。抜本的な解決に向け、ICTを活用した運営効率化の検討を始めました。

[ 実証実験の概要 ]

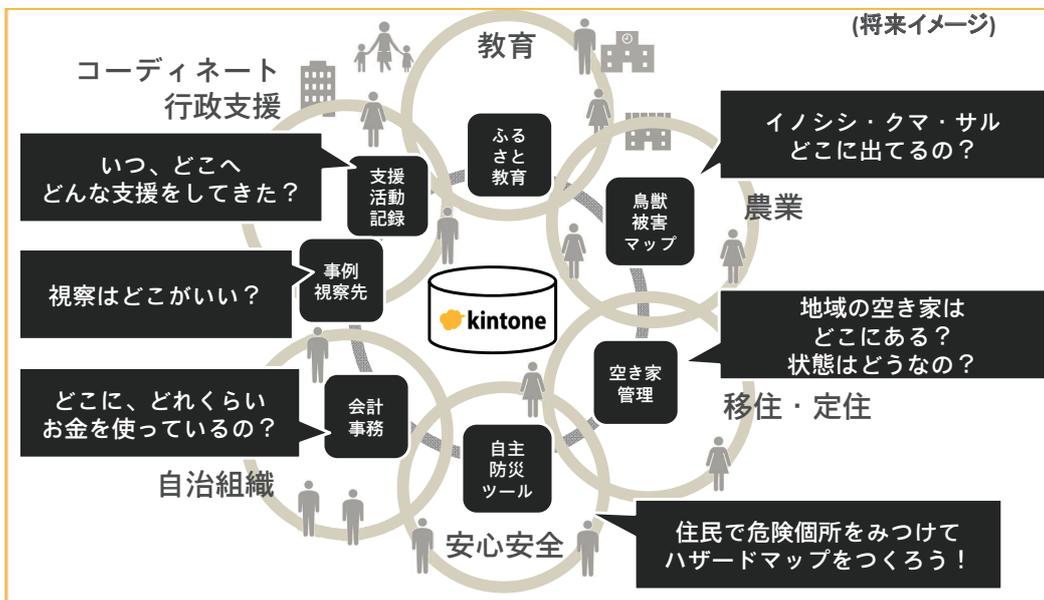
自治運営効率化、住民主体の地域づくり。

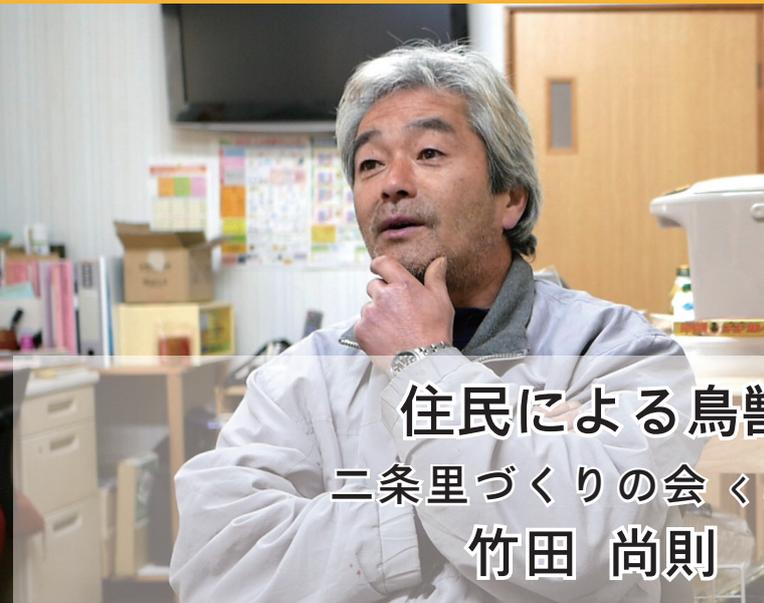
今回の実験では、益田市人口拡大課ほか関係部署、一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所、そして益田市の中山間地域の自治組織が、官民一体となりサイボウズ株式会社がサービス提供するクラウドデータベース「kintone」を利用しました。

同サービス上では、これからの中山間地域における地域運営に必要な事業の進捗管理や予算利用状況の管理、もしくは野生動物の出現情報といった、地域住民が日々の生活で必要になる情報も共有していくことで、ICTを活用した持続可能な地域運営のあり方を探求するものです。益田市は今回の取り組みを通じ、地域住民が主体となり地域課題を解決できるチームづくりを目指しています。

[ 実施期間 ]

2016年7月1日～





地域自治組織に鳥獣被害防除隊を結成。  
 住民からの目撃・被害報告を蓄積して、イノシシ被害をほぼゼロに。

2016年より、農地を荒らす鳥獣の目撃情報や被害報告を住民から集める体制を構築し、寄せられた情報はキントーンへ入力。自宅からでも情報が閲覧できることから、狩猟免許を持つメンバーで分析し、迅速な対策が可能となりました。また、入力された情報は市役所や公民館とも共有できており、地区住民への注意を促す放送を流すなどにも役立っています。





## 二条里づくりの会 竹田さん 理想は広域での情報共有

今年度に関しては、目撃情報も被害もデータが少なかったです。もともとは被害を減らしたいということで始めていますから、本当はデータがない方が良いんです。"防除"の考え方からすれば、被害がなくなっているというのは嬉しい話です。

最近、地域の中では年配の人もスマートフォンに変え始めています。そうなると、今後はもっと使い勝手が良くなってくると思っています。いつでも手元で入力できるようになれば、これまでのように家に帰って入力する必要も無くなってきます。

被害が減った大きな理由としては、地区全体で追い払いなどを徹底したということがあります。今年はクマが出没しない年でしたが、それでも2件ほどは目撃情報がありました。

昨年まで二条地区にいたサルの群れは、現在は他地区にいるようです。しかし、野生動物は移動しながら暮らしているので周期的に二条地区にも帰ってきます。今年は比較的安心していましたが、春からはまた目撃情報も多くなるのではと思っています。

レコード番号	日時	タイトル	種別	メモ	画像1
254	2017-10-08 8:47		クマ		
253	2017-10-04 8:40	ファクトリー方面に向かう。	クマ		
252	2017-08-09 8:00		サル	柿	
251	2017-08-08 16:30		サル	柿	
250	2017-08-08 12:00		サル	野菜	
249	2017-08-07 10:00		サル	集団	
248	2017-05-29 7:30	一頭 道路横断	サル		
247	2017-05-28 8:30	金ヶ峠 ジャガイモ被害	サル		

▲レコード一覧画面。地図のピンにはレコード番号を表示するようにしており、吹き出しをクリックすることで詳細画面を表示することができる。

行政のほうでも長年のデータが蓄積されています。それらを使って直近10年くらいのデータを分析してみると、サルの群れなどは、約30～40平方km程度というエリアで移動しているのではないかとわかってきました。50～60頭の群れが食べていくためには、それくらい広いエリアで動きながら、エサを求めているということになるということでしょう。

現在は、二条地区だけでキントーンを使ってデータ共有をしていますが、本当に群れの動きを把握しようと思えば、隣接する地区の情報も必要になってきます。自分たちの地区だけだと、どれくらい近くまで来ているかがわかりませんから。もっと広域な視点で隣接する地区との連携・共有ができれば理想だと考えています。

レコード番号	作成日時	作成者	更新日時	更新者
247	2017-06-01 13:41	藤田雅生	2017-06-01 13:47	藤田雅生

日時	種別	状況
2017-05-28 8:30	サル	被害

タイトル  
金ヶ峠 ジャガイモ被害

◀レコード詳細画面。日時、種別(イノシシ、サル、クマなど)、状況(目撃、被害)のようにデータ項目は多くない。位置情報と一緒に管理できるようになっている。



二条里づくりの会 佐藤さん

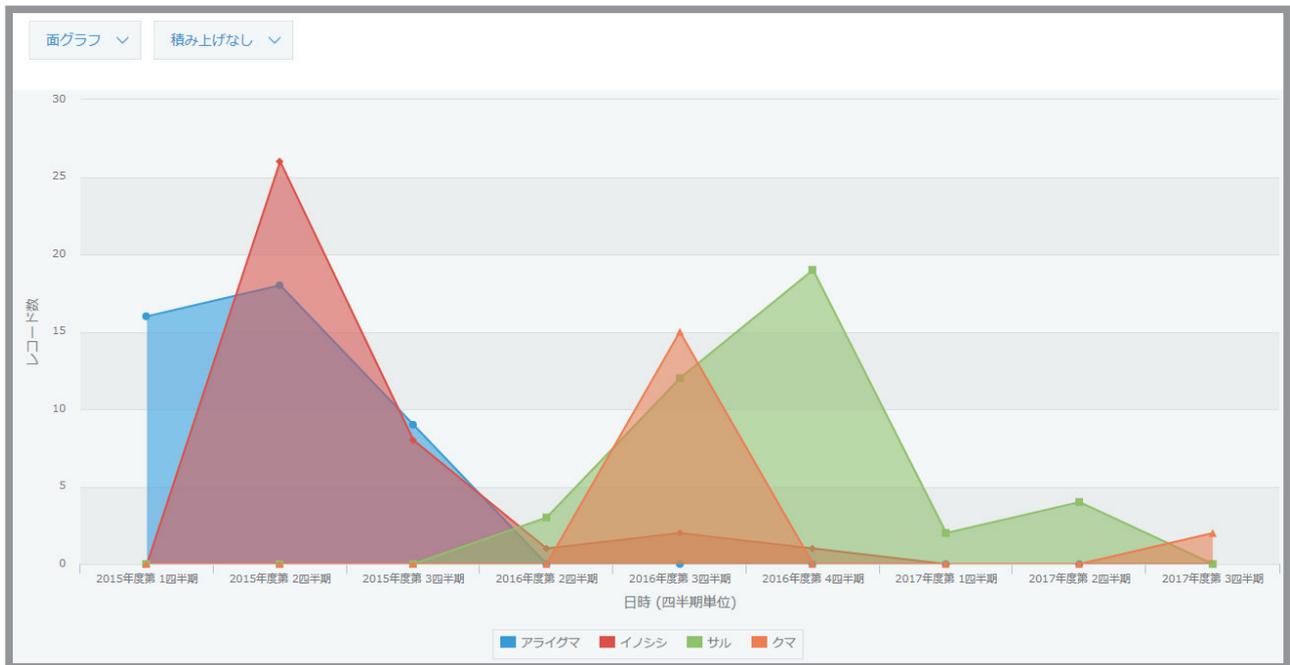
## 今は、未来のためにデータを蓄積するとき

今年は目撃情報も少なかったのですが、キントーンに使う機会も少なかったです。

しかし、これまでキントーンでデータを蓄積してきたことで、野生動物の通り道は見え始めています。目撃情報は「どこに野生動物にとっての必要な何があったのか？」ということの蓄積になりますから、私たちにとっても、それを「道」として把握できるようになってきています。そのことについては、キントーンの利用は一定の役割を果たせると思っています。

そして、もっと他のデータ（例えば、野生動物にとってエサとなり得る山の植物の生育具合）も含めて分析することができるようになれば、毎年の予測ができるようになるのではないかと考えます。

今は、必要最低限の情報をできるだけ多く蓄積する時期ですから、キントーンの機能について議論する必要はないと思っています。今の二条地区では、まずはデータ（事実）を蓄積していけるかがポイントなのです。これは、例え1年だけスポット的にやってみたとしても、私たちが目撃して来るものは少ないです。3年～5年程度の蓄積をしていくことで目撃してくるものがあるんだろうと思っています。



▲ 2015年度第1四半期～2017年度第3四半期までのサル・イノシシ・クマの登録記録数。インタビューにもあるように、2017年度はデータ数が減少している。特に2017年度のイノシシ（赤色）目撃・被害ともにゼロ件となっている。

住民自治として鳥獣被害対策に取り組む二条地区



◀ 毎年、地域住民向けに定期的な開催する鳥獣対策研修会。  
(写真提供：二条里づくりの会)



▲ ビニールハウスの廃材を利用した大型箱わなを自作。ICT技術搭載の監視カメラと捕獲作動システムを導入して多頭捕獲も可能に。  
(写真提供：二条里づくりの会)

▲ 大学生たちと一緒に放任果樹の撤去作業。  
(写真提供：二条里づくりの会)

平成 29 年度中国四国地域鳥獣被害対策優良活動表彰にて「中国四国農政局長賞」を受賞

2018年3月23日  
中国新聞 朝刊(島根欄)



高齢者を中心に安全安心な農産物を生産して保育所給食へ提供。  
 出荷管理にキントーンを活用して、事務作業時間を 80% 削減。

2017年5月より、これまでFAXでのやりとりが中心だった保育所とのやりとりをキントーンに移行。商品・顧客・要望・集荷・出荷をアプリ化して伝票も出力できるようになりました。導入前は月に10時間も費やしていた事務作業が、現在は2時間で終了しています。

データが蓄積をされていくことで、さまざまな視点でのグラフ化も可能になってきていることから、今後は作付計画などにもいかされていく可能性を感じています。





真砂の食と農を守る会「大地」事務局 青戸さん  
FAXでのやりとりからキントーンへ

現在、キントーンを使っているのは、私と保育所の調理担当者の皆さんです。保育所からはキントーンを通じて要望が入ってきます。出荷日ごとに自動集計されますから、それに応じて地域の「誰に、どれだけ」出荷してもらえるかを調整し、集荷した農産物を保育所に届けるのが私の仕事です。

キントーンが導入される前までは、各保育所から公民館にFAXが届き、そこに書かれた数量を手作業で集計しなくてはいけませんでしたが、どのくらいの量を届けることができそうかという見込みも各保育所とFAXでやりとりをしていました。それだと紙媒体なので、情報を確認するためには常に資料を持っていないといけませんし、情報を探すにも手間がかかります。キントーンを利用するようになってからは、過去のデータなどもどこにいても確認できるようになりました。

今回、保育所が要望数量を入力すると、自動的に見積もり金額が出力されるような機能も追加しました。こうすることで、保育所側



▲ 毎週公民館で開催される生産者会議。キントーンに登録されている保育所からの要望量をもとにして、「誰に、どれだけ」出荷してもらうかを話し合いながら決めている。

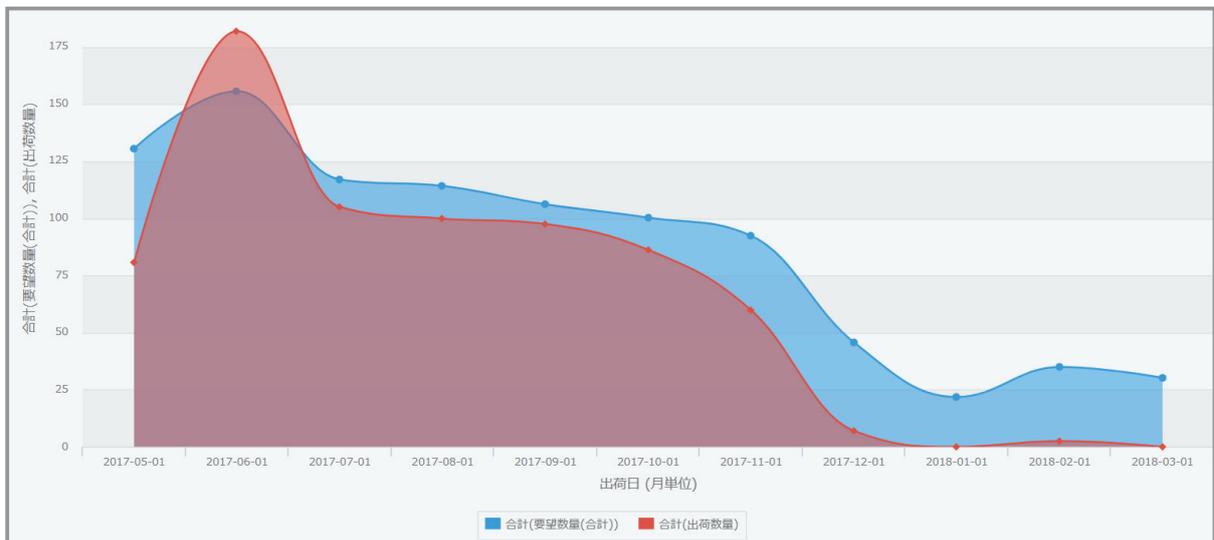
もコスト面を把握しやすくなるだろうと思ったからです。

実際には、保育所が要望する量を満たす出荷ができないこともあるのですが、そこは保育所と密なコミュニケーションをとりながらやりくりをしています。しかし、この1年間キントーンを利用してきたことによって、こうした過去のデータを分析できるようになりました。

今後は、これらのデータを共有することもできますので、今後は、生産者も生産量も限られている小さな地域の中で、どのように進めていくことができるかを地域の方々に相談することもできると思います。



◀ 毎週2回の出荷日の朝には、割り振りされた野菜を地域住民が運んでくる。



▲ キントーンで出荷管理をすることによって、データ蓄積されることにより、これまでのデータが分析できるようにもなった。グラフはこれまでの「玉ねぎ」の要望量と出荷量を重ね合わせた面グラフ。



吉田こども園 栄養士 山下さん

## 「地元の旬」を大切に作る献立づくり

取組みを始めた当初は「地域で出荷できる野菜って、どんなものがあるんですか？」という話からスタートしました。一般的に「旬の野菜」というのはありますが、実際には場所によってそれも違ったりします。「自分たちが暮らしている地域では、今は何が旬なのか？」ということを知らなかったこともあるので、地域の皆さんと取り組む中で教えてもらうことができるのは、実際に調理を担当する仕事をする者としては良かったな、と思っています。

真砂地区との取組みを始めてからは、和食中心の献立になってきました。真砂の野菜は農薬もほとんど使っていないので安心して使えるという点も大きいです。子どもたちも年間を通して野菜を食べ慣れてきていることもあると思うのですが、酢の物なども「もっと食べたい」と言ってくれます。



▲ 真砂の農産物で調理された給食の様子  
(写真提供：吉田こども園)

旬の時期には、特定の野菜を使う量も増えるわけですが、現場では献立を柔軟に変更することで対応できています。例えば、汁物、酢の物に同じ食材が重なったとしても「それが旬」ということで、皆さんには理解してもらっています。



▲ 真砂地区では毎月、保育所の調理担当職員と生産者が一緒に会議を行う。ここで、出荷できる農産物をお互い確認し合うことが「旬」を知ることになる。

キントーンを使い始めてからは、金額などもシステム上で見えるようになったのは良かったと思っていますが、パソコンの前に座って要望を打ち込むといった作業スタイルになったので、FAXの頃の比べて調理場ですっと手書きするといった手軽さは無くなってしまったかな・・・という印象も持っています。



▲ 保育所では「いつ」「なにを」「どのくらい」を要望アプリへ入力する。真砂の野菜は通年を通して、一定の価格であるため、見積りも同時に計算される仕組みとなっている。

## 帳票出力は Excel Repotone<sup>U</sup> プラグインを活用 出力するテンプレートを工夫して、月次精算にも活かす

生産者への支払いや、保育所への請求の際には、PC画面だけでなく紙媒体の帳票が必要となってきますが、真砂地区では EXCEL 帳票を出力するプラグインである Repotone U excel(株式会社ソウルウェア)を活用しています。

使い慣れた EXCEL で自由にテンプレートをつくることのできる点や、アプリ設定のみで帳票機能を付加できる点などが非常に便利であり、また帳票機能をいくつもつくることができるという点では非常に安価に導入できるものでした。

また、作成された帳票ファイルはレコードに自動保存することもできるので、キントーンにアクセスすることで、これまで作成した全ての帳票を確認することもできるようになりました。

ある生産者の月次集計画面

このボタンをクリックすると、精算伝票が EXCEL ファイルとして出力される。

商品コード	品名(ひらがな)	区分	品名	数量	単位	単価小計
01-019	だんごのこ	加工品	団子の粉	6.00	kg	¥ 4,320
04-032	ねぎ	野菜類	ねぎ	1.50	kg	¥ 660
04-033	ほうさい	野菜類	白菜	25.80	kg	¥ 3,096
04-038	ほうれんそう	野菜類	ほうれん草	2.30	kg	¥ 828
05-020	おれんじ	果物類	オレンジ	4.00	kg	¥ 640
06-002	かぶ	根菜類	かぶ	2.00	kg	¥ 208
06-005	ごぼう	根菜類	ごぼう	4.50	kg	¥ 1,548
06-007	さといも	根菜類	里芋	13.00	kg	¥ 3,640
06-012	だいこん	根菜類	大根	24.10	kg	¥ 2,892
06-014	にんじん	根菜類	人参	2.60	kg	¥ 520

精算伝票

真砂の食と農を守る会 大地

精算金額 ¥18,352

品名	数量	単価	
2018年2月1日～2月28日(出荷分)	¥ 18,352	1	¥18,352
合計			¥18,352

内訳書 2018年2月1日～2月28日(出荷分)

商品コード	品名	数量	単価	小計
01-019	加工品 団子の粉	6.00	kg	¥4,320
04-032	野菜類 ねぎ	1.50	kg	¥660
04-033	野菜類 白菜	25.80	kg	¥3,096
04-038	野菜類 ほうれん草	2.30	kg	¥828
05-020	果物類 オレンジ	4.00	kg	¥640
06-002	根菜類 かぶ	2.00	kg	¥208
06-005	根菜類 ごぼう	4.50	kg	¥1,548
06-007	根菜類 里芋	13.00	kg	¥3,640
06-012	根菜類 大根	24.10	kg	¥2,892
06-014	根菜類 人参	2.60	kg	¥520

領収書

真砂の食と農を守る会 大地

精算金額 ¥18,352

領収金額 2018年2月1日～2月28日(出荷分)

日付 年 月 日

氏名

▲ 月次集計をして、生産者に支払う金額が記載された精算伝票

▲ 「何を、どれだけ」出荷したのかわかるように内訳表も出力される。

▲ 生産者に支払いをした際に、サインをしてもらい、これを受け取りの領収書としている



## 訪問ケアにクラウドを試験活用

匹見歯科診療所

歯科医師 澄川 裕之

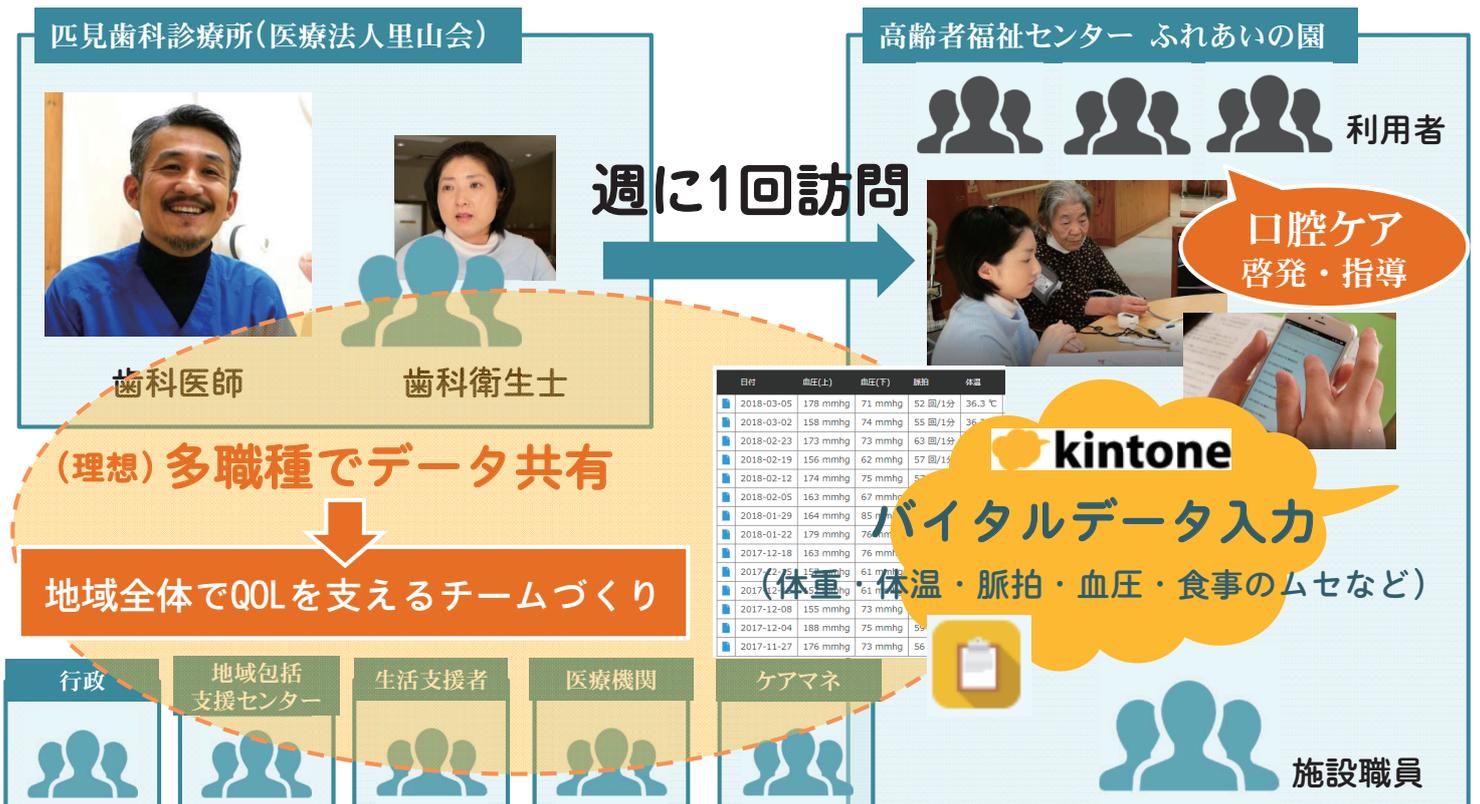


医療法人里山会

歯科衛生士 森本 緑

口腔ケアの重要性を歯科診療所から発信。  
地域包括ケア体制構築にむけて、クラウドでの情報蓄積を試行。

益田市匹見町にある唯一の歯科1次医療機関である「匹見歯科診療所」を運営する医療法人里山会では、今後は診療だけでなく、地域住民の皆さんが参加できるサロン事業の立ち上げを目指しています。今後、中山間地域で安心して健康に暮らしていくためには、医療・介護・生活支援などの面から具体的な連携が必要とされており、患者さんのデータ共有やケアチームのコミュニケーションツールとしてキントーンが活用できないかを検討しています。





匹見歯科診療所 歯科医師 澄川さん

## 食べる機能を支えるのが歯科医療 地域包括ケアを見据え、データ蓄積を試験導入

益田市匹見町の人口は約 1200 人。高齢化率 (65 歳以上) は 60% 近くになっており、冬は豪雪地域に指定されているほどの山間地域です。

私は、平成 24 年 4 月に益田市より匹見歯科診療所の運営を依頼されました。診療所には、1 か月に約 100 人～130 人が来院されます。延べ人数ですと 250 人～280 人くらいになると思います。

長年、国全体で「8020 運動」を推進してきて、現在は 80 歳で 20 本以上の自分の歯をお持ちの高齢者が半数以上になってきたと思います。これまでは高齢者になれば「入れ歯」をすることで食事する機能を補完していたのですが、今はご自身の歯を持った状態で食事をするようになります。それはとても良いことなのですが、同時に口の中には歯周病があるとか、むし歯もできやすかったりしますので、高齢になっても歯のお手入れが必要になってきます。歯があることで食事もできるし、話もできるし、飲み込みもできるのですが、口のまわりの機能を含めて管理していくことが必要になってきたのです。



▲ 匹見歯科診療所は益田市匹見町の保健センター内にある。毎週水曜日 (午前・午後) と土曜日 (午後) が診療日となっている。

私は患者さんの歯の治療をします。しかし、情けない話ですが、その患者さんが食事をして飲み込む姿というのは、ほとんど見たことがないんです。本当はそこまで知ることが理想なのかなと思うのですが、なかなかそういうわけにはいきません。そういう思いもあって、「今後、地域にサロンを立ち上げられないかな」と考えて準備をする中でキントーンを試験的に活用しています。

地域の方々の体調に関する客観的なデータを知ることができるのは、歯科診療にも大きく役立ちます。もし仮に体重が減ってきたら私たちは「栄養面が足りないんじゃないかな？」ということも考えます。しっかり栄養が取れていないとフレイル (虚弱) 状態になっていっているんじゃないかということにも早く気づくことができるかもしれないからです。

現在は試験的にデータをキントーンに蓄積していますが、昨今求められている地域包括ケア体制の確立などを考えると、将来的には介護をする方などにも共有していければと思います。自分たちの患者さんに限って言えば、歯科診療所内でスタッフは全て同じ情報を共有することになると思っています。歯科医療は歯科医だけではできません。私たちはチームとして診療をしていますので。



▲ 診療の様子  
(写真提供：匹見歯科診療所)



▲ 診療所の待合室  
(写真提供：匹見歯科診療所)

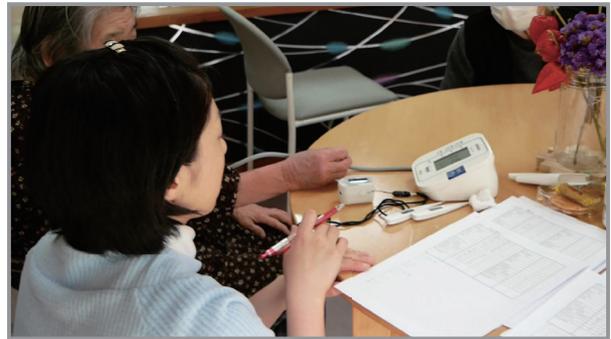


匹見歯科診療所 歯科衛生士 森本さん

## 毎週月曜日に計測データをキントーンへ入力

匹見町人口の半数以上が高齢者というのが現状ですので、健康で元気に年齢を重ねてもらいたいと願っています。私たちの役割は、歯科からそのことについてサポートしたいと思っています。「元気で美味しくご飯を食べてほしい」ということなのですが、歯科の役割というのは、フレイル（虚弱）の予防です。最近注目されているオーラルフレイル（歯や口の働きの軽微な衰え）の予防ですね。口の乾燥や噛めない食品が増えたなどの些細な口の衰えを予防することの取り組みをしたいと思っています。

その中でキントーンを利用して、歯科目線だけでなく多職種の方々と協力していきたいとも思っています。



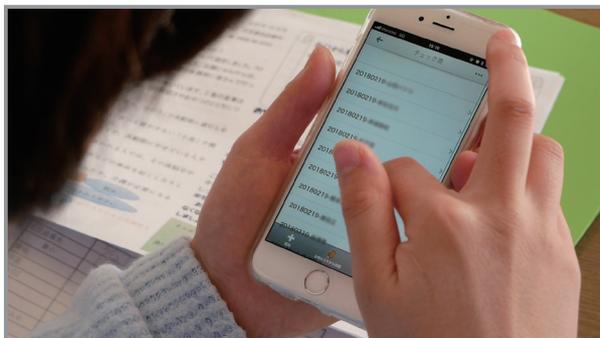
▲ 毎週月曜日に福祉施設を訪問し、体重や血圧などを計測している。

項目	2/12	2/19	日付
血圧値最大	174	156	血圧値最大
脈拍	75	62	脈拍
体温	37	37	体温
SpO2	6.1	6.4	SpO2
体重	89	95	体重
1食事中のムセ			1食事中のムセ
2食事残量	X	X	2食事残量
3水分摂取量	X	X	3水分摂取量
4朝気・参加意欲	0	0	4朝気・参加意欲
5食後のハミガキ	0	0	5食後のハミガキ
6食前体操	0	0	6食前体操
7身だしなみ	0	0	7身だしなみ
8特記事項			8特記事項

▲ 当初はキントーンのモバイルアプリに直接入力していたが、作業時間を短縮するために、現在は紙のチェック票に記入している。

昨年10月ごろ、地域にサロンをつくろうという話が持ち上がり、そこでは参加者の皆さんのバイタルデータを取らせてもらうことができればという話も出ました。そのデータを蓄積するツールとしてキントーンを利用してみようということになったのです。まだサロンを準備している段階ですが、こういったことがキントーンでできるかということを確認するために、高齢者福祉施設でバイタルや体温などを週1回のペースで取らせてもらっています。

今後、地域包括ケアとしての可能性はもちろんなのですが、独居やご夫婦だけの高齢者の方も多いため、クラウドであることを活かすという意味では、離れて暮らしている家族の方にも様子を知らせることができるような仕組みができないかなと思っています。



▲ 最近は、施設の職員さんから過去のデータと比較したいとの依頼ももらうこともあるので、現状は自分のスマートフォンから過去のデータを閲覧して数値を伝えている。



▲ 月に一度、口の健康に関するミニ講話をしたり、自分でオリジナルの会報「まんぷく通信」をつくって配布するなどお口の健康の大切さについて伝える活動をしている。

個人ごとにバイタルデータを蓄積

森本さんが使っている「参加者名簿」と「チェック票」アプリ

このスクリーンショットは、「チェック票」アプリのフォーム画面を示しています。上部には「キャンセル」と「保存」のボタンがあります。入力項目には、日付（2018-03-19）、参加者名、取得/クリアボタン、血圧（上/下）、脈拍、体温、血中酸素飽和度、身長、体重、BMI、食事のムセ、食事残量、水分摂取量、嘔気・参加意欲、食後のハミガキ、食前体操、身だしなみ、特記事項などが含まれています。

▲ 「チェック票」アプリのフォーム画面。参加者名はルックアップにより「参加者名簿」から取得できるようになっている。その際、同時に身長を取得することによりBMIも自動計算できるようになっている。

森本さんがバイタルデータなどを入力するのに使っているのは「参加者名簿」と「チェック票」というアプリ。

2017年11月中旬より、試験的にデータを計測させてもらっている。個人によってレコード数量の差はあるが、多い人は毎週計測しているので20件近くのレコードが貯まっている。

今後は、個人ごとにグラフ化をして閲覧ができるなど、カスタマイズが期待されている。



▲ 参加者ごとのレコード数

「参加者名簿」アプリの一覧情報がマスタ情報になっている。

このスクリーンショットは、「参加者名簿」アプリの一覧画面を示しています。表には参加者の氏名（ふりがな）、氏名、性別、年齢、身長などの情報が記載されています。右側には編集アイコンが並んでいます。

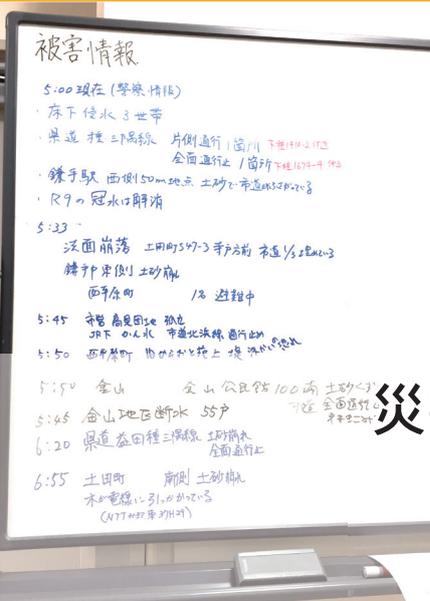
氏名(ふりがな)	氏名	性別
山田太郎	山田太郎	男性
田中花子	田中花子	女性
佐藤美咲	佐藤美咲	女性
鈴木健一	鈴木健一	男性
高橋さくら	高橋さくら	女性
中村大輔	中村大輔	男性
渡辺あかり	渡辺あかり	女性
小林拓也	小林拓也	男性
山本まゆみ	山本まゆみ	女性
水谷誠也	水谷誠也	男性
木村あゆみ	木村あゆみ	女性
伊藤健太	伊藤健太	男性
斎藤さくら	斎藤さくら	女性
高橋拓也	高橋拓也	男性
山本まゆみ	山本まゆみ	女性

このスクリーンショットは、「チェック票」アプリの「プロフィール写真」画面を示しています。参加者の氏名、性別、生年月日、年齢、身長などの情報が入力されています。下部には「チェック票」ボタンと「キャンセル」ボタンがあります。

この表は、「チェック票」アプリで蓄積されたバイタルデータの履歴を示しています。日付、血圧、脈拍、体温、BMI、血中酸素飽和度、体重、食事のムセ、食事残量、水分摂取量、嘔気・参加意欲、食後のハミガキなどの項目が列挙されています。

日付	血圧(上)	血圧(下)	脈拍	体温	BMI	血中酸素飽和度	体重	食事のムセ	食事残量	水分摂取量(コップ)	嘔気・参加意欲	食後のハミガキ
2018-03-19	185 mmhg	75 mmhg	52 回/分	36.5 °C	22.1	94 %	50.5 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2018-03-12	181 mmhg	69 mmhg	54 回/分	36.3 °C	21.4	98 %	49.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2018-03-05	178 mmhg	71 mmhg	52 回/分	36.3 °C	21.4	88 %	49.0 kg	なし	なし	0 杯	ふつう	する
2018-03-02	158 mmhg	74 mmhg	55 回/分	36.3 °C	21.4	98 %	49.0 kg	なし	なし	1 杯	なし	する
2018-02-23	173 mmhg	73 mmhg	63 回/分	36.2 °C	21.9	93 %	50.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	しない
2018-02-19	156 mmhg	62 mmhg	57 回/分	36.4 °C	22.3	95 %	51.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2018-02-12	174 mmhg	75 mmhg	57 回/分	36.1 °C	21.9	89 %	50.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2018-02-05	163 mmhg	67 mmhg	57 回/分	36.0 °C	21.4	94 %	49.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する
2018-01-29	164 mmhg	85 mmhg	56 回/分	35.9 °C	21.9	97 %	50.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2018-01-22	179 mmhg	76 mmhg	56 回/分	36.1 °C	21.9	98 %	50.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2017-12-18	163 mmhg	76 mmhg	60 回/分	36.5 °C	22.3	97 %	51.0 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2017-12-15	157 mmhg	61 mmhg	59 回/分	36.5 °C	21.9	98 %	50.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する
2017-12-15	157 mmhg	61 mmhg	59 回/分	36.5 °C	21.9	98 %	50.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する
2017-12-15	157 mmhg	61 mmhg	59 回/分	36.5 °C	21.9	98 %	50.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する
2017-12-08	155 mmhg	73 mmhg	61 回/分	36.2 °C	21.9	98 %	50.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する
2017-12-04	188 mmhg	75 mmhg	59 回/分	36.4 °C	21.7	98 %	49.5 kg	なし	なし	1 杯	ふつう	する
2017-11-27	176 mmhg	73 mmhg	56 回/分	36.5 °C	22.3	91 %	51.0 kg	なし	なし	2 杯	ふつう	する

「チェック票」が蓄積されてくると、「参加者名簿」アプリでは関連レコードとして最新のデータから一覧で確認することができる。



## 災害対策本部での活用を目指して

益田市役所 危機管理課  
中島 大輔

実際の災害対応において、クラウドの有効性を確認。今後は本部と避難所の情報共有ツールの構築を目指す。

2017年7月5日、豪雨による特別警報が出された益田市は災害対策本部を設置。当初はこれまでどおり電話やFAXでのやりとりが行われていましたが、増え続ける情報の整理にも時間がかかるようになり、避難所とのやりとりにもタイムラグが発生。その際、連絡員とのやりとりに使えるのではないかとキントーンのスレッド機能を活用。災害対策本部でも、即時の情報共有を実感する機会となったことで、現在、アプリの開発にも着手しています。





益田市役所 危機管理課 中島さん

## 避難所の状況を、災害対策本部と即時に共有

危機管理課というのは、防災をはじめ、国民保護、交通安全、防犯対策などといった多岐にわたる業務をしている中で、今回は防災の分野でキントーンを活用できればと取り組みを行いました。

今回は、「避難所の状況を報告する」というアプリを作成しました。避難所の開設状況や避難者数、避難所周辺の状況などを入力して、それらの情報を共有するものです。このアプリは、災害対策本部の職員や、本部で情報を収集する職員、また、避難所で対応する職員の使用を想定しています。

利点としては、避難所でも入力した情報が、リアルタイムで共有でき、災害対策本部や他の避難所でも確認することができる点です。また、スレッドやコメントを利用して、避難所と対策本部の双方から情報伝達できます。写真や動画も添付できるため、避難所の状況がより視覚的に確認できます。



### 気象情報

- 7月4日23時24分 大雨・洪水警報
- 7月5日0時15分 土砂災害警戒情報
- 7月5日5時55分 大雨特別警報

●雨量の状況 (7/4 18時~7/5 24時)

- 益田 111.5ミリ (最大1時間 40.5ミリ)
- 下種 245.0ミリ (最大1時間 48.0ミリ)
- 三隅 274.5ミリ (最大1時間 57.0ミリ)

### 益田市役所の体制及び避難情報

- 益田市災害体制
  - 7月4日 23時40分 警戒体制
  - 7月5日 1時30分 災害対策本部設置
- 避難情報及び避難状況

地区	避難情報種別			対象		避難所の状況	
	避難準備・高齢者等避難開始	避難勧告発令(解除)	避難指示発令(解除)	世帯	人数	箇所数	人数
種	7/5 2:00	7/5 4:00 (18:50)	7/5 5:30 (16:30)	115	292	2	104
鎌子	7/5 2:30	7/5 4:00 (18:50)	7/5 5:30 (16:30)	733	1,651	5	231
北輪道 (津田町の一部)	-	- (18:50)	7/5 7:00 (16:30)	36	91	1	21
安田 (津田町の一部)	-	-	7/5 21:00 (15:08)	36	91	1	11
その他	自主避難					20	175
計				891	2,051	29	542

▲ 大雨特別警報が発表された日の気象状況と市役所の体制

では、なぜキントーンでこのような使い方をするに至ったかということ、昨年7月に私自身が大雨で災害対応を経験したことによります。

実は、昨年度からキントーンを使用し、防災分野で何か活用ができないかということからは、色々と検討や実証をしているところではありました。そんな中で大雨災害を経験したのです。1時間の最大雨量が約50mmとなり、益田市で初めてとなる大雨特別警報が発表され、特に益田市東部の鎌手地区と種地区などで土砂災害の危険が高まりました。

益田市は災害対策本部を設置し、避難勧告・避難指示などの避難情報を発令しました。避難者数は最大500人を超えました。

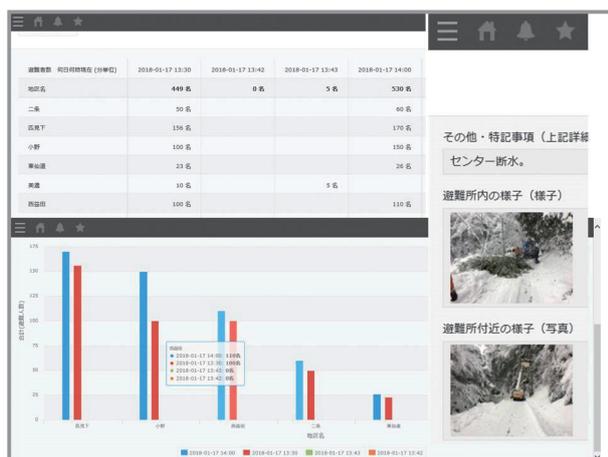
◀ 人口拡大課の職員による実際のやりとり

## 災害対策本部がキントーンを活用した経験から本格導入へ 課題は通常業務での活用環境の構築

災害対策本部を設置した場合、避難者数や被害状況など情報集約は総務班が対応することになります。実際に総務班として人口拡大課、情報政策課等が中心となり対応してもらったところです。避難所の多くが地区振興センターであったことや、避難所担当の1人も人口拡大課の職員だったこともあり、人口拡大課は当初からキントーンを使用していたこともあって、避難所と対策本部双方の様子をキントーンのスレッドを使って情報共有ができました。

これまでは避難所の状況や避難所周辺の状況の連絡については、電話やFAXで行いホワイトボードやパソコンで集約します。それを頼りに災害対策本部では報告・情報共有・意思決定をしていくという流れになっていたのですが、今回はキントーンの中でのやりとりをプロジェクターで投影しながら現場の様子を伝えられたことは本部意思決定におけるの有効な手段であったと思います。

スレッドを使って避難所の様子を伝えていた ▶



後日、この災害対応を振り返る中で、職員からは災害対策本部と避難所との情報伝達や情報共有について改善を求める意見が多く寄せられましたし、私自身も課題があると感じていました。また、災害後の事務処理についても、資料や情報量が多いため整理するのに時間がかかっていました。そこでキントーンの活用により、リアルタイムな情報発信と共有、災害対応後も情報の整理が容易にできるのではと考え、アプリを作成することにしたのです。

作成するにあたっては、避難所との情報共有を優先的に考えました。実際に避難所で対応する市役所職員を対象に研修会も開催し、今回作成したアプリを実際に使ってもらってアンケート調査も行いました。

◀ 今回作成した「避難所状況報告書アプリ」

参加者全員からアプリについては、入力しやすい、使いやすいという意見をもらいましたが、一方で、実際の災害時にキントーンにログインして入力ができるか不安だという意見も多くありました。7月の災害対応時、キントーンのスレッド機能を使用して、避難所から情報を発信してくれた職員は日常からキントーンを使用していたため、災害時すぐに使えたと考えられます。つまり、キントーンを災害時に活用するためには、普段日常的にキントーンを使用できる環境を整えることが必要であり、そのことが課題であると感じているところです。

今後は、アプリの入力項目を整理し、避難者数や物資の状況など重要項目に特化したものにした上で、より入力のしやすいものにしたと思っています。

また現場の状況を撮影したものを、すぐに報告できるようにするには、スマートフォンのアプリや、タブレット端末での使用も視野に入れて検討する必要があると思われます。

そしてなにより、災害対応時のみ使用するのではなく、通常業務において、日常的に使用できる仕組みを考え、災害時の有効なツールになるよう構築できればと思います。



▲ 職員向け研修会の様子

理想の形としては、市役所職員全員、消防や警察、自主防災組織とも情報共有ができればより迅速な災害対応につなげることができるのではないかと思います。

# 集落支援員の日報をクラウドで提出

(益田市役所 人口拡大課)

キーワード 業務改善 / 効率化 / 見える化 / 協働



月末に紙資料で提出していた日報をキントーンのアプリ化。支援員の活動の様子を関係者で共有可能に。

益田市では各地区の地域づくりを支援するために「集落支援員(地域魅力化応援隊員)」を配置しています。

平成28年度までは各自で日報を作成して提出してもらっていましたが、平成29年度からはキントーン上に業務報告(日報)アプリを作成し、全ての支援員が活用しています。

益田市役所では、公民館エリアを基本にした各地区に集落支援員を配置しています。集落支援員は、主に地域における地域づくり・自治組織づくりの支援をするのが主な役割です。

これまで集落支援員の皆さんには、どのようなことに取組んだのかといった日報を記録してもらい、月末に紙資料として提出をしてもらうようにしていました。

しかし、各地区から提出されたものを市役所側では再び集計しなければいけなかったり、各支援員の動きが把握しにくかったりするという課題もありました。

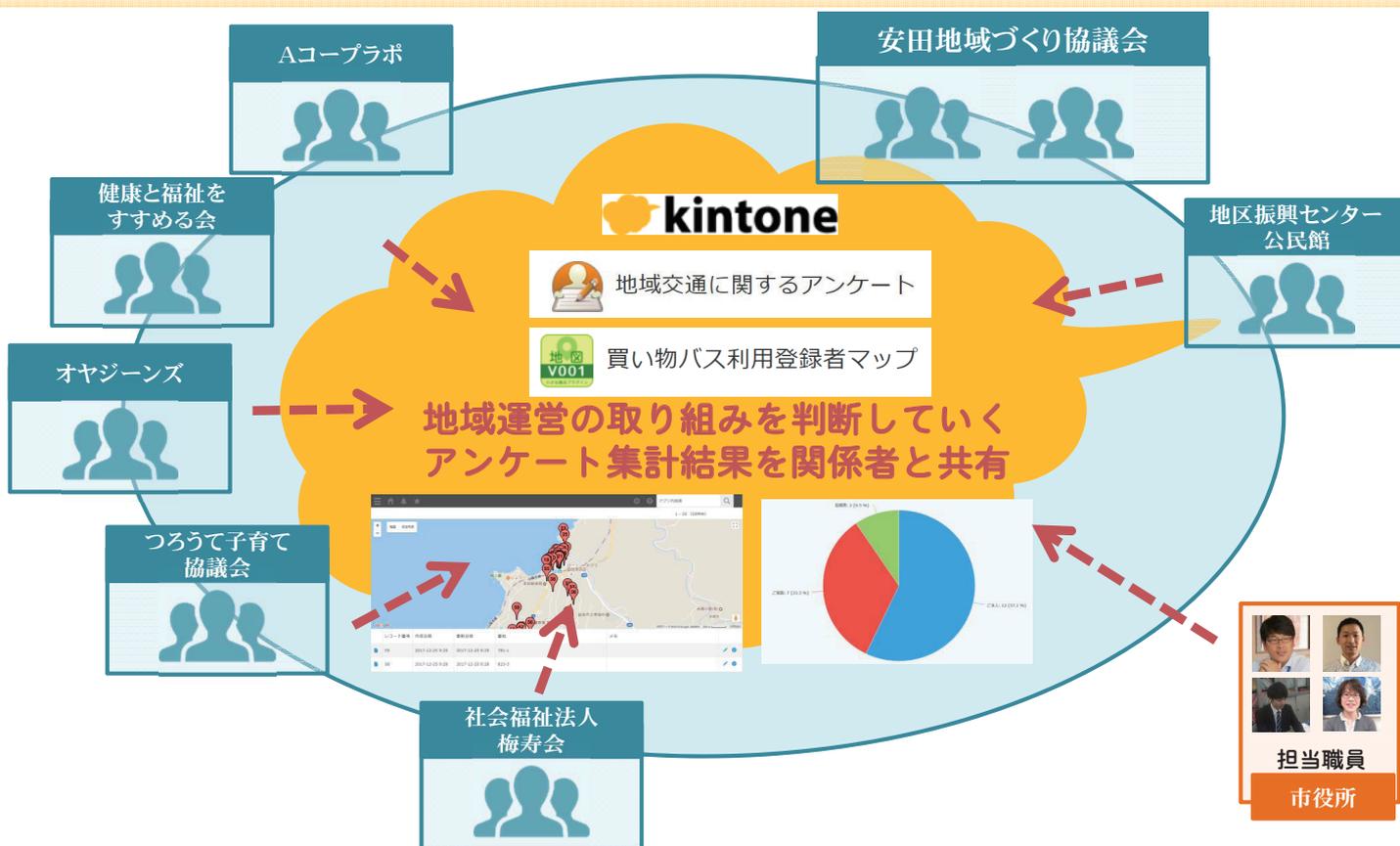
そこで今回、キントーンでアプリを作成して、支援員の皆さんにはアプリに日報を記載してもらう仕組みを構築しました。

各地区での取組みの状況が把握しやすくなったり、支援員どうしの情報共有としても活用できるようになりました。

# アンケート集計結果・買い物支援の分析に活用

(安田地域づくり協議会)

キーワード アンケート / 見える化 / 買い物支援 / 協働



高齢者の買い物支援に、地域内交通を計画。  
利用希望アンケート調査などをキントーンアプリで管理して共有。

安田地域づくり協議会では、平成 29 年度に総務省「地域の暮らしサポート実証事業」の取り組み団体として採択されました。この事業の中では、移動手段をもたない高齢者等にむけて買い物を支援するバス移動を計画しており、その希望状況を調査したアンケート結果などはキントーンアプリで共有することで、今後の事業展開を判断していく分析材料にしています。

総務省「地域の暮らしサポート実証事業」に採択された益田市安田地区は、事業を計画するにあたり地域住民にアンケートを実施。その結果などはキントーンに登録することで、関係者には結果を共有できるようにしました。

また、地域における多様な団体の連絡手段としてキントーンが活用できるように検討しています。

今後も事業を実施するうえで必要であればアプリを作成してみたいと考えています。

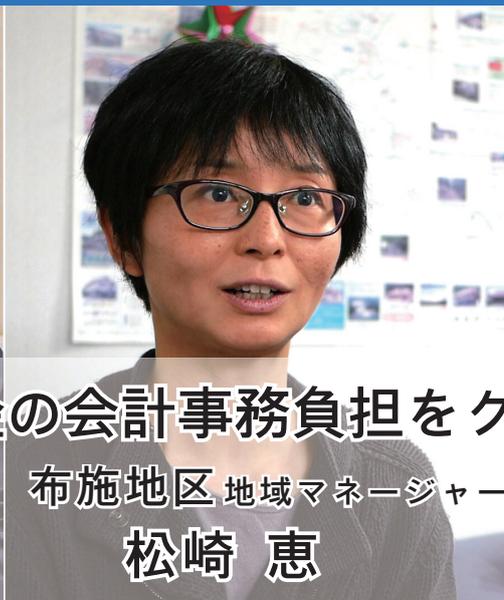
# 邑南町の協働の仕組み

[他自治体からのゲスト事例報告]  
クラウドを活用した

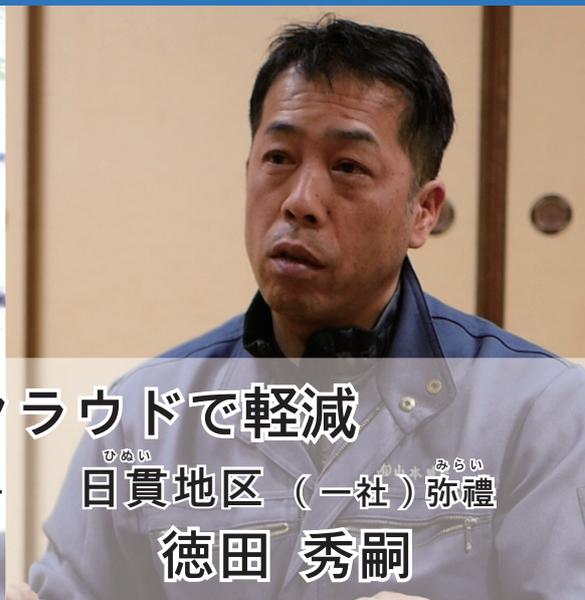


## 地区補助金の会計事務負担をクラウドで軽減

邑南町役場 定住促進課  
藤彌 葵実



布施地区 地域マネージャー  
松崎 恵

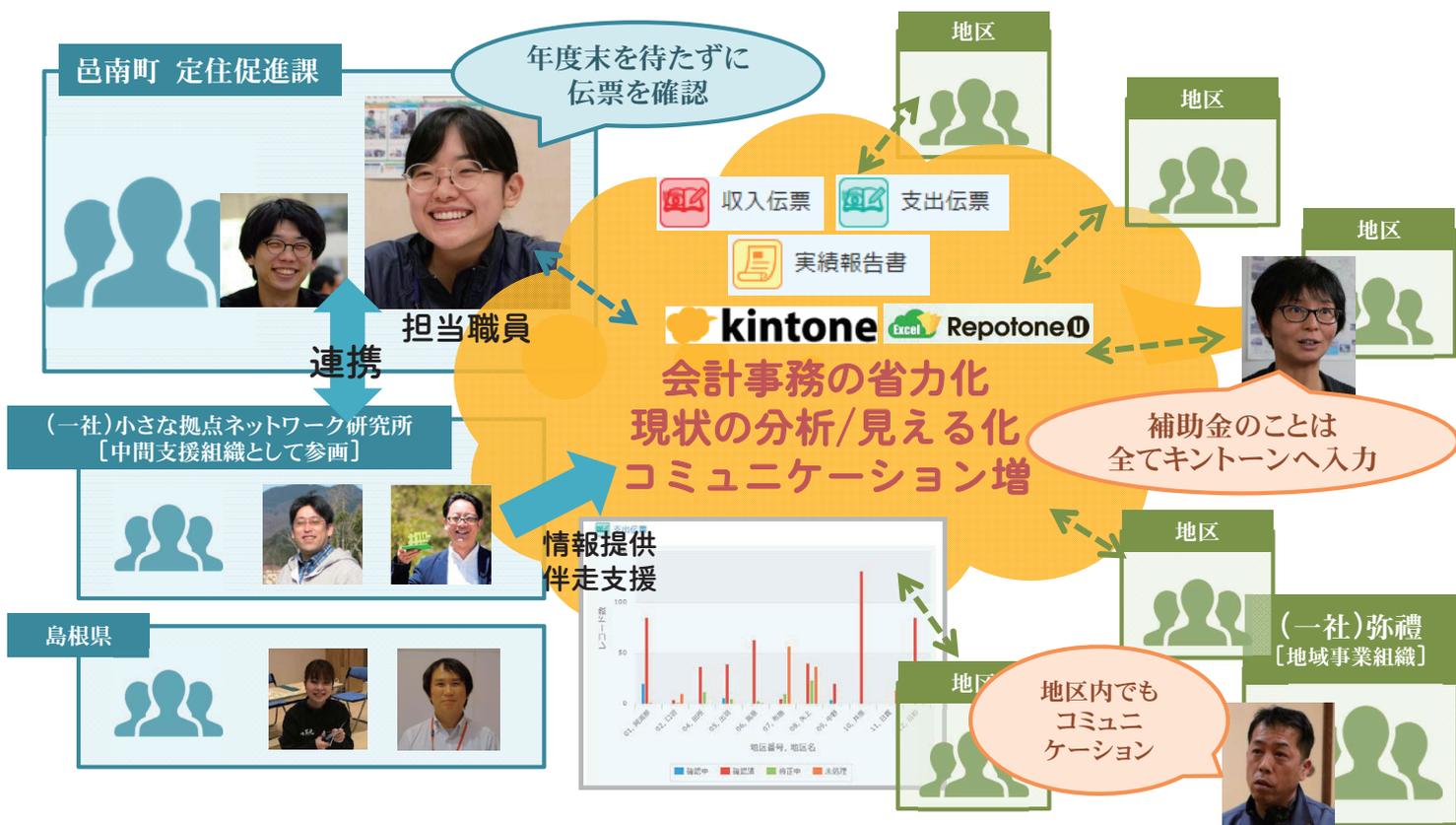


日貫地区 (一社) 弥禮  
徳田 秀嗣

補助金実績の確認を通年作業にして負担を軽減。  
自動集計を備え、実績報告書も出力可能に。

島根県邑南町では、平成27年10月に策定した「邑南町まち・ひと・しごと総合戦略」において、地域住民主体の事業展開をおこなう「地区別戦略」を位置付けました。各地区では300万円の補助金を活用して事業を展開しています。

各地区から会計事務の負担が大きいとの声があがってきたことから、平成29年度よりキントーンを導入。補助金に関する収入伝票や支出伝票を登録していくことで、年度末には実績報告書が作成できる仕組みにすることで、これまでは年度末に大きな負担がかかっていた確認作業を通年でできるようになり、地区とのコミュニケーションも増えています。





邑南町役場 定住促進課 藤彌さん

## 年度途中でも確認できるため大幅な負担減に

邑南町では、「地区別戦略実現事業補助金」という補助金制度があります。地方創生に関して全国の自治体で策定されている「まち・ひと・しごと総合戦略」ですが、邑南町では町内にある公民館エリアを基本単位とした12地区に対して「住民主体で各地区毎の戦略を策定してもらい、それを支援する」ということを大きな位置づけとしており、各地区の取り組みを財源的に支える制度として、この補助金があります。平成28年度から4年間あるのですが、毎年、各地区300万円上限として全12地区に補助をしています。

補助金制度ですので実績報告を受けなくてはなりません。その際に、会計のレシートであるとか請求書の写しなどを全て添付して提出してもらうことになっています。しかし、年度末になると、役場ではこの実績報告をほぼ1名〜2名で一気にチェックしなければならないことになっていました。

キントーンを導入する前までは、紙で提出されるので、チェックをする際、記入漏れや宛名、但し書き、内容、その書き方で良いのか、などを含めて、一つひとつチェックをします。チェック後には、それを12地区に一旦お返しし、地区が修正したものを、また戻して来られるという作業になります。補助金であれば、どこの自治体も同様な流れになると思いますが、邑南町では、その負担がとても大きいというのが問題意識でした。

ステータス	伝票番号	請求日	支払日	内容	金額	対象事業	科目区分	品番	地区番号	地区名	内訳	レコード番号	
未処理	2018-03-04	2018-03-06		運動器材購入	36,828 円	運動・スポーツの振興	04補助費	123補助費	09	12	日野	■ 補助費等	823
処理済	2018-02-15	2018-02-21		地区別戦略補助	1,200 円	運動・スポーツの振興	04補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	765
処理済	2018-01-26	2018-01-26		地区別戦略補助	9,000 円	運動・スポーツの振興	07補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	641
処理済	2018-01-14	2018-01-30		地区別戦略補助	913 円	運動・スポーツの振興	04補助費	11電気料	29	12	日野	■ 補助費等	735
処理済	2018-01-13	2018-01-30		地区別戦略補助	1,200 円	運動・スポーツの振興	04補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	704
処理済	2017-12-31	2017-12-31		地区別戦略補助	1,461 円	運動・スポーツの振興	04補助費	11電気料	29	12	日野	■ 補助費等	734
処理済	2017-12-28	2017-12-28		地区別戦略補助	9,000 円	運動・スポーツの振興	07補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	640
処理済	2017-12-26	2017-12-28		平成28年度1230	864 円	運動・スポーツの振興	04補助費	09ガラス、パンフレット	29	12	日野	■ 補助費等	668
処理済	2017-12-24	2017-12-24		運動器材購入	842 円	運動・スポーツの振興	04補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	669
処理済	2017-12-15	2017-12-20		地区別戦略補助	1,380 円	運動・スポーツの振興	04補助費	123補助費	29	12	日野	■ 補助費等	703
処理済	2017-12-12	2017-12-21		平成28年度1230	19,300 円	運動・スポーツの振興	05補助費	07学費料	29	12	日野	■ 補助費等	670
未処理	2017-12-04	2017-12-04		運動器材購入	216 円	運動・スポーツの振興	05補助費	07学費料	29	12	日野	■ 補助費等	635
処理済	2017-12-01	2017-12-01		平成28年度1230	1,680 円	運動・スポーツの振興	05補助費	11事務費	29	12	日野	■ 補助費等	672

▲ 「支出伝票」の一覧画面  
ステータス管理を使用することで各レコードに対して、「未処理」「確認中」「修正中」「確認済」のように状況が把握できるようにした。

▲ 「支出伝票」の入力フォーム

今回はキントーンにアプリを作成して、各地区から直接1件ずつ伝票を登録できるようにしました。登録された伝票はリアルタイムで役場でも確認できるようになっています。資料もそこへ添付していただきます。もし記入した点に不備があるようなら、伝票レコードにコメントをするかたちでご連絡をします。そうすると、地区の方が修正していただきますので、修正後に再度確認をするといった流れで処理が進められるようになりました。

これは行政・地域共に負担が軽減していると思っています。これまでだと、年度末の限られた時間の中では1件ずつ、その都度の返事をしていく時間は取れないこともあり、チェック後にまとめて連絡する形になっていました。これは地域のほうにも一度に大きな負担をかけているなという想いはありましたので、そういったことが解消されたと思っています。

また、年度末に提出されたものを一気にチェックするというところは、すごく細かいところまでのやりとりはできないこともありました。しかし、通年で確認作業ができる今年度は、細かなやりとりや確認もコメント機能を通じてできるようになりました。



呂南町 布施地区 地域マネージャー 松崎さん

## 小さなことでも役場とやりとりできる安心感

キントーンを使った会計処理自体はすごくやりやすいと感じています。実は以前にも、地域でエクセルに詳しい方がおられましたので、その方が会計ソフトを作ってくださいました。入力していけば決算書も印刷されて出てくるような仕組みになっていましたので、それはそれで便利だったのですが、ただし、年度末には伝票をプリントしたり、領収書をコピーしたりして、提出用に実績報告書を1冊作らなければいけなかったんです。年度末には、その手間もが結構あったのですが、キントーンが導入されてからはそれも無くなりました。

今回は年度の途中でキントーンが導入されたということもあり、既に執行していた実績情報を改めてキントーンに入力するのはちょっと手間でしたが、それも終わり、使い始めると便利さを感じるようになりました。

補助金のことでわからないことがあれば、キントーンを通じて役場に確認できたり、伝票を作成すれば役場のほうでも見てくれてコメントをもらえる。これまでであれば、年度末に修正していたことも、確認しながら会計を進めていけるようになりました。

ちょっとした小さな事柄だと、役場に電話するにしても相手の手を煩わせるようで悪いな・・・と思っていました。また後日に確認すれば良いや、と。今はキントーンで、ちょっとしたことでも確認が取りやすくなったと思います。簡単に尋ねることができるので、助かります。Eメールですと、少しかしこまった感じになり、それなりの文章にして連絡しないといけないような気がします。キントーンを使い始めたことにより、役場とも気軽にコミュニケーションが取れるようになったのは、とても安心して作業を進めていけるようになったと感じています。

The screenshot displays the Kinton software interface for entering a transaction. The form includes fields for region number (07), region name (布施), fiscal year (平成 29), and invoice number (084). It also shows a table for account classification with columns for account number, name, and rate. A summary section shows a total amount of 23,544 yen, with 23,544 yen eligible for subsidy and 0 yen ineligible. A comment thread on the right shows a conversation between Ms. Matsuzaki and Ms. Sasaki, discussing the recording date of a receipt.

小さな事柄でもレコードのコメント欄を利用して役場に確認できるようになった。▲



邑南町 日貫地区 (一社) 弥禮 徳田さん

## メンバー間で情報共有を可能にして事業を遂行

邑南町の日貫(ひぬい)地区の地区別戦略事業を進めるうえで一般社団法人 弥禮(みらい)という法人を設立して活動を始めました。

現在、地域にある古民家を改築して、宿とフロントをつくって交流事業の準備を進めているところです。宿の収益は地域に還元できるようにし、フロントのほうは地域の方々も使えるような拠点として考えています。

邑南町の地区別戦略実現事業においてキントーンが導入されたことで、法人メンバー内の情報共有として活用しています。これまで外部とのEメールのやりとりも、メンバーそれぞれに転送をしていたので、どうしても全員で共有しながら進めていく感覚をつくりだしていくことが難しかったのですが、今はキントーンの中で全て共有しながら進めていますので、全員が同じファイルを見ながら役割分担を調整したりするコミュニケーションがしやすくなったと感じています。

また、それぞれの作業がどんな具合に、どのくらい進捗しているのかも、全員で共有できるようになったのは、キントーンを使っているからだと感じています。



▲ (一社) 弥禮のスペース。必要なアプリを自分たちでつくり、情報を管理・共有できるようになった。

◀ メンバー間でのやりとりは、協議したいテーマ毎にスレッドを作成してやりとりをしている。

# 取り組みの「成果」と「壁」を探る



檜谷：ここから約1時間ほど、みなさんと一緒に対話をしていきたいと思っています。対話のテーマは「チャレンジする中での成果と壁」です。この2年を振り返る中で、何ができて、何が壁なのかを確認できればと思っています。そこで最初ですが、この実証実験が「そもそも何をやりたかったのか」ということを確認したいと思っています。

実は、僕自身は実証実験よりも前にキントーンを知っていたということもありましたから、こういうプラットフォームを使えたら良いなというイメージはありました。これを人口拡大課のほうで、共感してもらえたところから今回のような取り組みも始まったわけですが、人口拡大課のほうではどうだったのでしょうか？少し思い出してもらって良いですか？

岡崎：人口拡大課の岡崎といいます。本日のパンフレットを1枚めくってもらおうと、実証実験のことについて書いてありますけれども、益田市は市内20地区あります。そこで地域運営の仕組みをしっかりとつくっていき、それが延いては人口拡大につながっていくだろうという想いから、関係性をつくりなおしができないだろうかということで、自治組織づくりを進めています。

そうした自治組織づくりの中では課題が複雑で、今起こっている事象に対しての原因と結果がなかなか捉えにくいことが蓄積していますので、それをどのように紐解いていくとか、そういったことを地域のみなさんが一生懸命やっています。その人たちは

「複雑だからこそ、連携しないと難しいよね」というのは共通の理解なんです。その連携してこうとする人たちは、本当に多様な人たちがいますので、時間を合わせたり、場所を合わせたり、本当に大変です。また、その人たちを取りまとめ調整するコーディネート役をする人は更に大変で、調整するだけでもしんどい。そういった本気で頑張ろうとする人たちがどんどん疲弊していく姿をみて、なんとかならないかなというのが正直なところです。

そこで当時、県立大学と市教育委員会がふるさと教育の活動に保育園や小学校と取り組みを進めているそのプラットフォームとしてキントーンを使っていて、その中でキントーンのデータベースと地図情報の連携した仕組みがありました。プログラミングの知識がなくてもできるということだったので、手軽さを感じましたし、とにかく直観的に良いなと思っていて、地域の中で連携して困っている方にぜひ使ってほしいという想いが発端です。それが、こうした実証実験につながったということです。



## トークセッション（成果報告会より）

檜谷：サイボウズさんからすると、どういう経緯で益田市のことを知って、どんな風に出会ったのか、どんなところに興味を持ったのかというのはどうですか？

中村：もともと僕自身は、社長室というところにいる、新しい場所でキントーンを使って、サイボウズがやりたいチームワークあふれる社会にしたいというのが願いです。我々はソフトをつくりたいということではなくて、チームワークあふれる社会にしたいという想いがあるソフトもつくっているわけです。その中で、僕は農業と地域と教育という分野であり使われていない場所で面白く楽しく楽に使える場所ってないかということで益田市に出会ったんですね。その時に、出会ったのは、社会教育課 大畑課長さんで、その伝手を辿ると檜谷さんに出会いました。

なんで興味があったかという、こういう取組みってIT業界では幾つもあったりするんです。関東だと、ある大都市ではサイボウズではなくて、外資系のプラットフォームを使っています。例えば道路が破損していたりすると地域の人が情報を入れて、そのデータに基づいて道路の修繕に来るみたいな、そういう仕組みが動いていたりするんですね。し

かし、これはあまり使われていないシステムでして、行政が主になってそれを導入したんですが、「使われていないから、とにかく使え！」っていう形で、とにかく道路の壊れているところを探しに行きみたい指示をしている自治体なわけですよ。それって本末転倒だろうと。そういうのを見ていると、IT業界も良くないと感じますね。そこで、「住んでいる人が何か課題に思っていることをサイボウズのキントーンを使って役に立てるようにはならないだろうか？」という、そういう背景があり、今回は協定を結んでやっているというのが経緯ですね。

檜谷：この取り組みも2年近くやっていて、色んな取り組みをサイボウズさんにも報告させて頂いたりしているわけですが、量や種類としては、どんな風に感じられていますか？

中村：まず、サイボウズ的に言うと、「地域をチームにしていく」というのが、この益田のフラッグシップというか、益田のプロジェクトだと思うので、ほぼ全社員が益田のことを知っています。全社員が地方に行くと、益田のことをしゃべっている。これくらいサイボウズの中では益田のことを、みんなが知っています。

そういう意味では共感するアプリも各社員によって違うと思います。鳥獣対策で盛り上がっている社員もいますし、防災で盛り上がっている社員もいれば、農業で盛り上がっている人もいます。色々なところでのボリュームをサイボウズの中では感じとっています。素敵な事例や学びの場だと僕は思っています、ありがたく思っています。

そうした取り組みを通じて、地域をチームにしていこう、そのためのツールとしてキントーンが使えないかということに初めて思ったし、岡崎さんとお話しされた地域運営の仕組みの中で、色々なところに時間やエネルギーを使っているのを目の前にしながら、なんとか楽にできないかなという想いが市役所側にあったところからスタートしたということですね。そして実際に地域に使ってもらいました。今日も、二条地区や真砂地区などでは、かなり使ってもらっているという印象があるのですが、ここで少し地域の方のお話しも聞いてみたいです。最初に真砂地区のみなさんにお話をきいてみたいと思います。

檜谷：真砂地区では、本日は農産物の出荷という点でキントーンを使っていることとお話し頂い

たのですが、岸本さんはまた違う使い方をしてますよね。どんな使い方をしてるのか、少し教えて頂けますか。

岸本：益田市の地域魅力化応援隊員（集落支援員）で真砂地区の担当をしています岸本と申します。益田市は地域自治組織というのを公民館エリア毎につくっているのですが、そちらの運営支援をしています。また、兼務で自治組織の事務局長もしています。

真砂では事務局業務の効率化を狙って、キントーンを導入しています。当初は通常業務のほかに、大きな事業を2つ抱えていて、その整理をしていくのがすごく大変で、真砂以外の方々ともやりとりをしないといけない状況だったこともあり、そのためのスペースやアプリをつくって、情報共有をしていました。今日、(一社)弥禮(邑南町)の徳田さんが発表されていた事例と同じような内容ですね。そうすることで、事業を進める仲間と情報を共有することが、すごく楽になりました。その案件は既に終わったのでアプリは使っていないのです。

それから、今、真砂地区は新しく交流拠点をつくりまして、貸しスペースなので、様々な

## トークセッション（成果報告会より）

使い方をしています。その利用や活用一覧のアプリをつくって使っています。利用状況を登録していくアプリなのですが、予約情報（いつ、誰が、どこを使うのか）を入れて使っています。当初は、色々な人が使ってくれて、勝手に予約してくれてというのができれば良いなとも思っていたのですが、そういうわけにもいなくて、実際のところは来られた方にアナログで書いてもらっている利用履歴簿を私がキントーンに入力しているというかたちです。



榎谷：入力して整理をしているってということですかね。

岸本：そうですね。当初イメージしていたような使い方はまだできていないのですが、利用に関するデータが蓄積していけるので、すごく助かっています。蓄積したデータはグラフ化もしますので、こういった使い方をしていけるのかがわかってきます。意外と会議利用が多かった、とか。先日、ホワイトボードを買ってほしいという話も出てきて、会議の利用が多いということがわかっていたので、さっそく導入できたということもありました。

榎谷：大庭さんは公民館の館長さんだけでなく、「と

きめきの里真砂（地域自治組織）」の会長もされていますね。最初からキントーン導入については、ずいぶんと積極的だったと思うのですが、どうしてですか？

大庭：真砂地区は、平成23年の島根県地域力醸成プログラム事業から食育活動に取り組み始めました。そのときに市販の会計ソフトを導入しましたが、これは大変高価なもので、維持管理費もお金がかかるものでした。そういう時に、榎谷さんからキントーンを紹介されたので、すぐに飛びついたわけです。

また、ここに青戸くんがいますが、彼は公民

館の職員ではありません。管理委託をする上でも、簡素化したアプリケーションが欲しいということと、実証実験ということで価格面で安いということもありました。榎谷さんにカスタマイズ開発してもらえないだろうかということで、お願いもしました。こういう流れになったのは、みなさんお気づきかもしれませんが、真砂地区では各農産物の価格を年間で統一しているんです。そういうこともあって、ソフトへの登録なども楽だったのではないかと思います。

されているからこそ見えてくるものもあるという話もありました。ただし、保育所からの要望と、地区からの供給という点では色々な事情もあってそうならない。そのあたりを教えてください。

榎谷：今、真砂地区の商品マスタを画面に映しました。これをもとに発注をかけたりされるんですね。白菜が150円/kgなんですけど、すごく安いんですね。

青戸：要望どおりに出荷できるのが一番良いのですが、農産物は天候や時期によって変わってきます。また、「たくさん採ってしまった。保管するのが大変。それでは持って行ってみようか。」という感じで、おばちゃんたちは持って来てくれたりもします。例えば、じゃがいもが8kgしか要望されていないのに「私も私も・・・」と、20kgくらいになることもあるんです。それが出荷日の朝に起こる現象なんですね。そんな時には、保育所に電話し

大庭：少し安すぎるんじゃないかという話も出ています。最近はレストランにも西洋野菜を出荷するようになって、地区全体で220品目ほどになっています。ただし、真砂地区が保育所などに出荷する場合はバーコードをつけたりすることもないですから、そういう経費が必要ないことを考えると、生産者には理解してもらえる価格だろうとも思っています。



榎谷：今日、発表して頂きましたが、データが蓄積

## トークセッション（成果報告会より）

て「今日は、じゃがいもがたくさんあるんだけど、購入してもらえないだろうか？」と連絡をします。すると、「良いですよ。持ってきてください。」と快く言ってもらえます。そんな状況があるので、要望するよりも多く出荷ができたというようなデータが蓄積されるんです。逆に、要望されてもほとんど量を出荷できないこともあります。この蓄積されたデータというのが、事務局としても出荷数の管理ができた、おばちゃんたちに野菜を多く作付けしてほしいということをお願いするときの大切な根拠になってくると思っています、これは今後、効果が出せるんじゃないかと思っているんです。

檜谷：ありがとうございます。保育所側は、こういったケースで電話がかかってくる場合、どんな風に対応をされているんですか？

山下：もし予定以上の出荷があった場合には、その時に「じゃがいもを使って煮物にしようかな」といったことを考えて対応しています。うちの園では、臨機応変に色々の変更をさせてもらっています。なので、一応、献立表はつくって出しますが、やはり野菜はその時が旬なので、無駄にはしたくないという気持ちで野菜を優先して使うようにはしています。なので、

す。

あとは、先ほど言ったように、蓄積されたデータを参考にしながら生産してもらえる農産物をできるだけ増やしてみたいなと思っています。

檜谷：ありがとうございます。真砂地区のみなさんにお話をさせていただきました。高齢者の方々のお話が出ましたけれど、今日は、匹見歯科診療所の森本さんにも話をさせていただきました。次は、匹見町の皆さんからお話をできればと思います。それでは、簡単に自己紹介をしていただけますか？

石田：匹見地域包括支援センターで社会福祉士をしています石田と申します。よろしくお願いたします。

柳原：益田市社会福祉協議会匹見支所の柳原と申します。よろしくお願いたします。

竹田：匹見地域包括支援センターで管理者をしています竹田と申します。

檜谷：最初に、匹見歯科診療所の森本さんの取り組

頂けるものは頂くようにしています。

檜谷：ちなみに、蓄積されたデータを保育所側で見ることにはありますか？

山下：それは、まだ無いですね。

檜谷：真砂地区のほうも、データが蓄積されてきたから意識し始めたところもあると思うのですが、どうですか？

青戸：そうですね。キントーンを使い始めて、もう少しで1年になるんですが、こういうデータが確認できるというのは、次に繋がっていくという風に思っているところです。

檜谷：ちなみに、青戸さんとしては集出荷の取り組みの中で、今後に欲しいアプリとか、実践したい使い方などはありますか？

青戸：本当は、おばちゃんたちにもタブレットを持ってもらって、こんな要望があるんだよっていうのをわかってほしいというのが理想なんです。しかし、80歳以上の方々の方がタブレットをみて、野菜の管理をしていくというのはなかなか難しいというのがありますが、そういったことができればなあと思っています。

みをお聞きになって感想などを教えていただけますか？

石田：まだ始まってからそんなに時間が経過していない取組みなので、データなどもまだこれから蓄積されて行くのだと思います。発表後にブースでお話した時にも、利用者の方ともだんだんと顔見知りになってきた仰っていました。最初は「あんた誰？」といったところから始まって、今は来られたら歓迎してくれるようになってきたということで、これからどんどんデータも含めてやっていけたらという印象は持ちました。

檜谷：ありがとうございます。ちなみに「“地域包括支援センター”って何ですか？」という基



## トークセッション（成果報告会より）

本的な質問なのですが、簡単に教えていただけますか？

竹 田： 65歳以上の高齢者の方の生活全般についてご相談をお受けする機関になっています。医療に関する相談であれば医療機関につなぎ、福祉介護の範囲であれば保険サービスの利用につなげていたり、介護保険以外の福祉サービスにもつないだり、生活の困りごとや心配ごとを少なく軽くしていたりすることを支援しています。また、高齢者虐待のことや権利擁護ということに関しても関わりを持たせてもらう役割です。

檜 谷： 匹見地区というのは、高齢化率が高いというイメージがありますけれども、福祉の観点であるとか、こうして医療や介護、生活を支えるというようなこともあると思います。ちなみに、みなさんは匹見地区の問題や課題を、どんなところにあるとお考えですか？

竹 田： 匹見地区は高齢化率が高く、地域内にある医療機関は内科専門の先生が1名、あとは歯科を委託されている先生が1名いらっしゃいますが、歯科診療所が開いているのも週2日です。医療的などところだと、とても弱いというか、サポート体制がなかなか十分に

れない地域だという点です。益田の市街地まで受診に行くとなると、バスやタクシーを乗り継ぐといったように交通面で少し難しい面もあり、専門の医療機関に通いたくても行きにくいので、地域内にある内科の先生に頼っていると感じています。

歯科衛生士である森本さんの分野ですと、匹見地域の高齢者というのは林業を支えてこられた方たちなのです。食事面でも、「とりあえずお腹がいっぱいになれば大丈夫」「はみがきも1日1回するかしないか」「うがいをすれば大丈夫」というような意識を持たれている方が多く、今、森本さんが高齢者の方に対して口腔ケアや摂食について発信・啓発をされているというのは、とても重要だなと思います。そういう活動には、社会福祉協議会や地域包括支援センターでも協力させていただいて、地域全体に広げていけたらと思っています。

檜 谷： ちなみに、「今回の取り組みのようなデータを共有していくと、自分たちの診療をおこなう際にも役に立つ」という匹見歯科診療所 澄川先生のコメントもありましたが、みなさんのお立場からすると、どんな可能性があると思われませんか？

竹 田： デイサービスであれば、看護師さんが毎回バイタルチェックをされますので、そこである程度のデータが取得できると思います。しかし、デイサービスに出られる時だけのデータというのも限られているので、そこで、そのデータから「最近、体重が減ってきているよね」「血圧が気になるよね」ということが出てきたときに、こういったデータから医療機関にも早めに相談ができたり、繋いだりできるという使い方ができるのかなと思います。データをもとに、今の高齢者の方の健康状態だとか、そこから起きている生活問題などを推測できるのかなと思います。

檜 谷： ありがとうございます。それでは、今回事例発表をして頂いた森本さんにお尋ねしたいと思います。実際にキントーンを使って取り組みを進めて来られたわけですが、難しかった点や改善したい点などがありますか？

森 本： 最初は、手書きとスマートフォンでの入力を同時にやっていたのですが、データを取られるほうも慣れてきますので、こちらも急かされるようになってきて、手書きでやることになってしまいました。そうするとキントーンへの入力の後回しになってしまうので、少し

想像していた感じとは違ってきているなとは思っています。

檜 谷： なるほど。こうした取り組みですが、匹見地域のみなさんで一緒になってやれることは何かありますか？どうでしょうか？

柳 原： 澄川先生からも「サロンの立ち上げをするにはどうしたらよいか？」というようなご相談を社会福祉協議会のほうにさせていただいているのですが、そういう歯科に関するサロンを立ち上げて協力できたらと思っています。

檜 谷： ぜひ、そういったことが実現できれば良いなと思っています。皆さんも応援してもらえたらなと思います。匹見地域のみなさん、あり



## トークセッション（成果報告会より）

がとうございました。

せっかくなので、他の自治体関係者の方々にもお話をお聞きできればと思います。以前、浜田市旭町のほうから真砂地区に視察に来られたんですよね？キントーンに興味があって浜田市では、どんなことが起きているんですか？

児島： 浜田市役所旭支所の児島と申します。今、浜田市では益田市や邑南町がキントーンで盛り上がっている間を、その窪地みたいな感じになっていて、何も起こっているわけではありませんが、漏れ伝え聞いて、すごいことが始まっていることとお話を聞いております。浜田市でも、平成23年から「まちづくり総合交付金」という制度をやっています、世帯数や面積とか、そういった積み上げで算定するのですが、山間部だと100万円～200万円くらいの交付金をもらって地域のことを取り組むということになっています。その受け皿になっているのが、公民館エリアごとの「まちづくり推進委員会」という組織です。

こういったお金も使ってもらっている中ですが、何か困りごとをお聞きすると、とにかく会計処理が大変なんだということでした。そ

浜田市の中でも、私以外にも何名かキントーンに関心がある人間がいたりするんですけども、現場に近い人間こそ、こうした寄り添った支援の方法を内部でも提案していきたいと思っています。

檜谷： 僕も浜田市役所の何名かの方から相談を受けたときに、山間部などを担当している部署から、こうした相談を受けていますので、主に現場と一緒にやっている方々が興味を持たれるのかなと感じています。

それでは邑南町さん、今日は地区の会計事務のところについてお話をさせていただいたのですが、他のところはどうでしょうか？

田村： 職員の連携というのは興味を持ちました。小さな役場なので、顔が見えるし職員も力を発揮しているのですが、業務における横の連携というのがなかなかできないことに課題を持ってしまして、キントーンのようなツールを使うことで、そういったところがチームとして動けるようになるのかなというところを、益田市さんの話を聞いて思ったところで

藤彌： 現在、邑南町では、行政と地区の方々とのや



の地域でいったい何をしなければいけないのかなとか、取り組みをどういう風に見直したら良いのかなという、そういった議論の前に、とにかくもらったお金をどうしようかというところなのです。なかなか手に余る金額で、その会計処理にも困っておられるということが、地域づくりから更に住民の参画を遠ざけているようなことにもなっていて、地域がチームになる以前の問題があります。その障害になっているのは、会計処理や事務処理の煩雑さというのが非常に大きいかなと思っておりまして、今日の邑南町さんの取り組みをお聞きしていると、非常にそれに対して良い手当てができるんじゃないかな、と思って可能性を探っているところです。

りとりが主なのですが、真砂地区の保育所の事例をお聞きして感じたのは、それ以外でも、病院だったり社会福祉協議会だったり、JAとか、野菜をつくっているおばちゃんたちとか、そういったところまで繋がると、もっと色々なことができそうだなと思いました。

徳田： 私の住んでいる日貫地区で、今問題になっているのは、JA店舗を地区民で運営していくことや、保育所の子どもが少なくなってきましたから、魅力化を進めて子どもたちを受け入れていく体制に力を入れていくようなことを考えているのですが、今日の他の事例の中でも、そういったところにすごく参考にな



## トークセッション（成果報告会より）

るところがあったので、日貫地区全体として取り組めるような形としては可能性を感じました。

檜谷：ちなみに日貫地区だと、どういった方々にキントーンを使ってもらえそうなイメージがありますか？

徳田：すぐに取り組めそうなこととしては、小学校との連携です。校長先生が地区の人に「ぜひ学校に来てください」という感じなので、まずそこから魅力化的な小学校ができるんじゃないかなと思っていて、小学校や保育所などと連携するのが近道かなと思っています。

檜谷：それでは、その他の参加者の皆さんにも感想を聞かせていただければと思うのですが、いかがでしょうか？

Aさん：私は九州からやって来ました。益田市には初めて来たのですが、キントーンのことを知りたいというよりは、地域やどんな人たちがいるのかということを知りたいという気持ちでした。

今日の報告会の感想としては、キントーンを使うことでより円滑になったというのはすご

くわかりました。ただし、そもそもの土台として、皆さんの熱量というかモチベーションというか、地域に対する想いがキントーンを使う意味を作っているように感じました。それが良い感じでコラボレーションしているし、地域の良さが活かされているなと感じました。

Bさん：山口県から参りました。大学で地域連携の担当をしています。いかに若者に地域の魅力を知ってもらうか、課題に触れるか、人との交流を生み出せるかというのをミッションに活動をしています。

山口でも、色々と地域づくりやまちづくりのお話を聞くことがあるのですが、益田市のように人が交流し合って、もっと良くしていこうという動きは山口ではなかなか見つけることができていません。「自治体にやってくれ」ではなく、「私たちがやるんだ」という意識は非常に勉強になると思う一方で、どうやってやるんだらうというのが非常にモヤモヤしているような気持ちです。

Cさん：大学の地域連携セクションで働いています。職種は地域連携コーディネーターということです。

特に感じるのは、学生の動きが見えるようになっていないですね。それぞれが任意の団体で、サークル単位で地域に入っていくこともありますが、それについては伝え聞くだけで、具体的にどこに行き何をしているのかということを知ることができず、地域連携のセクションにいながらもなかなか把握できていないということがあります。そのあたりをキントーンを使って共有できるのであれば非常に有意義だなと思います。

Aさん：大学では、フィールドワークなどの体験学習で地域に入っていくのですが、期間が限られているので本質的な課題が見つからないまま、なんとなく提案をして終わっちゃうことが多いと思います。

しかし、こうした客観的なデータが既にそろっていて、そこからスタートできるとすれば、より本質的な課題点を大学生自身が見つけることができますし、解決策へつなげることができると思います。

Bさん：大学というのは地域に出て行き、課題を解決していくというのもミッションとしてあるので、こういう蓄積されたデータやグラフを活

用できると研究もはかどりますし、地域の課題解決にも役立つんじゃないかなと思います。

また、地域と大学生のコミュニケーションにおけるワンストップ窓口になれば良いなと思いました。長年やってきた人にしかできないということではなく、データやグラフを見ながら若い世代でも取り組みができる。次世代との共有という意味でもすごく役立つんじゃないかなと思います。

Cさん：学生は世代をまたがって地域で活動をするんですけども、世代間の情報共有というのがあるようで、実は全然無いんですね。同じ地域に出向いていっても、以前の関りについて何も聞いていませんということもあって、そういったところはもう少し共有していくことができればという想いがあります。

檜谷：そうですね。確かに先輩たちが貯めていったデータの上に更に自分たちの取り組みが重なってくると、より厚いデータの上に成り立つ分析ができるようになるようになるかもしれませんね。

Dさん：大学院生です。この1年間、益田市で研修

## トークセッション（成果報告会より）

のプロジェクトをやっています。私から見たら、キントーンは本当に色々な素晴らしい事例があると思っています。

活動をしている中で、地区外から来た者からすると、一番難しかったのは「情報」なんです。地域の情報は、電話をして尋ねるか、実際に現場に来た時に公民館の黒板などで確認しています。黒板には、その月の行事が書いてあるんですが、本当は毎月公民館の人に電話をして黒板の写真を撮影して送ってほしいと言いたかったくらいです。

外部からだ、地区の情報は全く見えないんですね。本当に単純なことなんですけど、そういった情報を外部に出してくれると、色々な人も地域に寄ってくると思います。外国の人だって、こうした田舎に来て理解したい人がたくさんいる。そういう意味では、キントーンはインターネットを使った情報発信にも使えるんじゃないかなと思いました。

それともう1つ。皆さんの話を聞いていて思ったんですが、ICTは今までの制度をすごく変える力があると思います。でも、今日話を聞いていますと、今まで紙やFAXでやっていたことを、そのままキントーンでまた

キントーン上で見え隠れするんです。そんな中で、どの星が残るんだという、そんなイメージを持って今日はここに学びに来ました。でも、「あっ、そう星はあるんだ」ってことも知りました。

鳥獣対策のところでは竹田さんたちとよく会うんですけど、僕は普段の経過を知らないこともあるので、「なんで使われなくなったの？」って思っていたわけですよ。でも、今日はお話を聞いて「なるほど、鳥獣が来なくなったのね」ということがわかりました。そういった使われなくなった理由を知れたのはありがたいし、それをまた我々も会社の中で伝えていきたいし、且つ、僕らはこうした製品を通じて日本の地方のみなさんだけでなく、世界のみなさんに広めていきたいなと思っています。

檜谷：次に白石さん、感想をお願いします。今年度から益田市だけでなく邑南町でも使われ始めたわけですが、小さな拠点ネットワーク研究所としては、どんな風を感じていますか。

白石：今年度の途中から邑南町の現場でもキントーンを導入しているわけですが、感じているのは、先ほど布施地区の松崎さんがインタ

やっているという感じがあります。ぜひこの機会にやり方を変えることができれば、それに費やす時間も減らせるはずですよ。もっと効率的にやることができるはずなのに、紙に書いて、またキントーンで入力するという話を聞いていると残念に思ってしまう。仕事が増えるだけじゃないですか。ICTの面白さは、時間とやり方を変えられるということだと思います。それがとても言いたかったです。

檜谷：ありがとうございます。まとめの時間に入りたいと思います。

中村：今日、リアルにみなさんのお話を聞いていて気になっていたのは、「実は、無理矢理キントーンを使うようになってるんじゃないか？」ということでした。そうだとすれば、すごく残念なんです。僕はいつも自然体でみんなが使える姿が見たいと思っています。

益田市では、もう1年以上キントーンを使っていたと思いますけれども、その中で、生まれてきたアプリケーション、離れていって無くなったアプリケーション、それから最初はログインして入ったアカウント、だけど今は使われていないアカウント、まるで宇宙のように星が生まれて去っていくようなことが

ビューでお話しされていたように、互いに声をかけやすくなっているんじゃないかなと思います。もちろん電話を含めて直接でやりとりをしている方もいらっしゃるし、しかし、ちょっとしたことでもキントーン上でコミュニケーションを取り始めているというのは、すごくあるんじゃないかなと感じています。

先ほど、同様のお話もあったのですが、それは延いては世代交代につながる可能性があるんじゃないかなと思っていて、年配の方でもキントーンを積極的に使っている方もいらっしゃるし、若い方は比較的スムーズに入



## トークセッション（成果報告会より）

りやすい環境の中で互いのコミュニケーションがキントーンでも生まれると、今まで遠慮や溝があったところに、橋渡しができるんじゃないかなと思ったりしています。最初の導入時には、少し強引にキントーンを使ってくださいね、ということになるのかもしれませんが。

僕も使い慣れてくると、色々なことができることに気づいてきました。当社団としても、そこについてもっとサポートできるようになってくると良いのかなとも思っています。

榎谷： データ蓄積や分析できることについては、今日の発表の中でも色々なシーンで出てきたのですが、ちょっとしたコミュニケーションがすごくしやすくなったという話もすごく大切な要素ですよ。物事を進める上で、コミュニケーションの問題だよってことは、頻繁にあるんじゃないかなと僕自身も思いました。

山本市長： もしかしたら今日は、市内よりも市外の来場者のほうが多いんじゃないかと思っています。今回の取り組みが市外の方々にも関心を持っていただいて、報告会においでいただいたというのはすごく嬉しいですし、驚きです。

たんですけども、実際には空は晴れ渡っていて、それから避難されている方も少しずつ家に帰りたいという気持ちや、実際に家に帰っておられる方もいて、そういう情報は庁内にいるときには全くわからなかったんです。

ということは、当たり前なことなんですけど、キントーンに何が打ち込まれるかというのが、とても大切なことなんだろうと思います。即座に必要なデータを打ち込むことによって、それをリアルタイムで多くの人が共有できる。もっというならば、色々な過程において、文字データだけでなく画像や動画なども残っていった情報を整理していくことができる。使い方も更にブラッシュアップしていく必要があるな、と思ったところです。危機管理課には更に有効な活用手法を磨いていってほしいな、と思っています。

それから、今回の3者協定というのは、実証実験のための協定で、取り組みによって益田市が効果を得ているわけですけども、他の地方や自治体にも活用してもらおうということをお話していますし、それを願っているわけですね。なので、益田市も試行錯誤をして、そういう意味では先駆者としての想いを

キントーンはプラットフォームとして非常にシンプルで汎用的ですので、活用の方法も広がりが出てくるという点では、すごく可能性を秘めているんじゃないかと思っています。

それから、自分自身の経験の話をしますと、本日、危機管理課の発表でもありましたとおり、昨年7月の災害のときは、災害対策本部会議を頻繁に開いたんです。ここでは災害の現場や、避難所からの情報が入ってくるんですけども、それらの情報にも限りがありますので、後々振り返ってみると、十分な情報をもとにした判断がその場ではできていなかったなということが分かったんです。この日は午後になって少し状況も落ち着いてきましたので、避難所に行ってみようと思いました。その大きな動機としては、避難しておられる方々が不自由な思いをされていないかなどを確認する意味でも、慰問というような形で行こうと思ったんです。被災者の方々の心情というのも直に聴くことができました。

どこが大きな発見だったかというのと、例えば気象データとか客観的な数字からいうと、まだまだ避難所に居て頂かないといけない、そのつもりで救援物資や食料なども確保してい

持って、これから更に活動をしていきたいと思っています。

榎谷： 今後、邑南町の方々こうした情報をシェアしていくというの、また良いのかもしれないですよ。

白石： キントーンは使いながら色々な発想が生まれてきますし、自分たちでアプリをつくって修正したり改善したりができるので、それはとても良いなと思っています。それを益田市や邑南町の中だけで閉じてしまうのではなくて、地域をまたいで使うエリアや人を増やしていけると良いなと思います。二条地区の事例発表のようにイノシシやサルなどが移動した先との情報共有もきつと必要になってくることを考えると、エリアを広げるような仕掛けができると良いなと思いました。

榎谷： 野生動物は市町の境をまたいで移動しちゃいますからね。色々なことを考えなくてはいけないということは、二条地区のお話の中でもあったのかなと思っています。

中村： 僕が担当している分野は農業、地域、教育という3つがあるんですけど、教育の分野で公立小学校においてキントーンを使う取り組みを

## トークセッション（成果報告会より）

しています。益田でもできないかなと思っています。

2点目としては、匹見歯科診療所のバイタルデータの取り組みであるとか、益田市でもIoT益田同盟さんのような動きもありますが、キントーンは人間でなくても機械からダイレクトにデータを登録することができるんですね。そういったプラットフォームとしても、ぜひ使って欲しいなとも思います。

3つ目ですが、サイボウズは「チーム応援ライセンス」というのを発表しました。益田市の取り組みも参考にしたのですが、300ユーザで年間9900円（税抜）という価格にしました。これは普通の企業が使ったり、行政が使ったりするのは異なる料金体系です。例えば、PTAや地域のサッカークラブが活用するイメージです。益田市でも、今回の取り組み以外のところでも、チーム応援ライセンスに該当するようなチームがあれば、ぜひキントーンを使ってもらいたいなとも思います。

檜谷：僕も小学校のPTA役員をやっているのですが、ぜひキントーン使いたいなとも思っています。

今日はトークセッションという形式で進めてきました。もしかしたら、もっと聞きたい、もっともっと喋りたいということがあったのかなとも思っています。今日の報告会を通じて、初めてお知り合いになった方や、つながったという方もいらっしゃると思いますので、初めて益田市に来られたという方も含めて、今後もぜひ益田市に関心を持っていただきたいですし、僕らも一緒に学びをしていきたいと思っています。本日は、これで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

# キントーン連携サービスの実践について



(一社) 小さな拠点ネットワーク研究所 檀谷

## フォームクリエイターとkViewerの活用

昨年度よりキントーンを活用した地域づくりを進めていく中で、より多様な活用方法を模索していくためにはカスタマイズだけでなく世の中に提供されている「連携サービス」も選択肢として考えていく必要があると感じていました。

そこで2017年度には、サイボウズスタートアップス株式会社様 (<https://cstap.com/>)のご好意により、キントーンとの連携サービスである「フォームクリエイター」と「kViewer」の長期試用ライセンスを提供していただくことができました。

一般的に企業の皆さんが導入するキントーンとは異なり、私たちのような住民・コミュニティ組織・行政と住民の協働関係において、これらのサービスがどのように使える可能性があるのかを検討・模索させていただきました。ライセンスをご提供いただいたサイボウズスタートアップス株式会社様には厚くお礼を申し上げます。

ここでは、本年度活用させていただいたいくつかの事例やそこから見えた課題、今後の可能性を記述いたします。

### [ フォームクリエイター ]

#### キントーンにおける申込み / 受付フォームでの活用について

フォームクリエイター (<https://cstap.com/product/formcreator.html>) を使用するにあたって一番多く活用した事例はイベントなどの申込み / 受付フォームです。本年度、何度か講演会などのイベント受付において、実際にキントーンアプリと連携させて受付をおこないました。

ここではフォームクリエイターを活用した際に感じたことを紹介します。

### [ 便利さ ] ノンプログラミングで作成できる

これは受付フォームを作成する際に、非常に少ない時間で完成してしまう点は非常に便利さを感じました。外部フォームからキントーンアプリへ登録できる方法はいくつかありますが、フォームクリエイターはプログラミングの知識を求められないので、一般の方々にも選択しやすいサービスだと考えます。

例として、今回の成果報告会を告知した件を取り上げます。今回、ネット上での告知は簡単にウェブページが作成できるクローバPAGE (<https://www.qloba.com/>) を活用しましたが、そのページから作成したフォームへ



▲ 作成した成果報告会のクローバPAGE

平成29年度 ICTを活用した持続可能な地域運営のモデル構築の実証実験成果報告会(2018/3/10開催)

所属

氏名

性別  男性  女性

連絡先

Eメール

[午前中]キントーン体験会への参加  しない  する

▲ フォームクリエイターで作成した申込みフォーム画面

リンクしました。実は、クローバ PAGE でもキントーンへ登録するフォームが作成可能なのですが、こちらの設定については JSON 形式の定義を作成したりする必要もあるため、一般の方々が短時間ですぐに活用できるということにはならないと思います。そういった意味でもフォームクリエイターは画面上の設定でフォームを作成できる点は安心して使えそうです。

## [ 注意点 ] URL が変更できない点に注意

フォームクリエイターを利用する際に注意すべき点としては、一度作成したフォームの URL を自由に変更できない点です。

申込みフォームなどに活用する場合、そのアドレスをチラシやパンフレットなどに記載したい場合があると思います。しかし、フォームクリエイターでつくられたフォームページの URL は非常に文字数が多く、チラシに掲載するには向きません。そういった場合のために QR コードもあるので、そちらを利用

したほうが良いです。

私が実際におこなってしまった失敗の 1 つとしては、その URL を他の短縮 URL サービスを利用してチラシに掲載してしまったことです。しかし、チラシを配布した後に、フォームから入ってくるデータを格納するキントーンアプリを別のアプリにする必要が出てきました。そうすると、あらためてフォームクリエイターでフォームをつくれれば良さそうなものですが、新たなフォームとなるため URL は変更されてしまいます。すでにチラシは配布済みですから、元のフォームで運用せざるを得ない状況になりました。

こうしたことをおこさないためには iframe でフォームを挿入したページを作成し、そのページをチラシに掲載するなど、間に URL のクッションとなるようなものが必要だと感じます。

## [ フォームクリエイター ] フォームの管理をどのようにしていくか

今回、フォームクリエイターのシステム連携では檜谷のアカウント情報を活用しました。しかし、これだとフォームをつくるのができるのは檜谷だけになります。フォームクリエイターが設定だけでフォームをつくるのができるのは非常に魅力的で、コミュニティ組織や NPO 団体などでも利活用できそうなのですが、今回の実証実験のように多様な主体が同じドメインに共存するキントーンのかたちになると、「フォームクリエイターは誰が管理すべきか?」「フォームをすぐにつくりたいけれど、管理者に依頼する必要がある」といったように、一定のルールの中で活用をしていかなければなりません。

また、多様な主体が共存するがゆえに、フォームクリエイターのような連携サービスを必要とする団体と、そうでない団体があると思います。また、1 年中常に必要な団体と、イベントや研修会のようにスポット的に必要とする場合もあると思います。こうしたスポット的に必要とする場合にも対応できるような仕組みがあると理想です。



## [ 今後欲しい機能 ] 複数の管理者が設定できる

私たちがのような活用方法では、フォームクリエイターに複数の管理者が設定できるような機能があれば非常に便利だと感じています。フォームクリエイターのログイン情報を複数人で共有しながら運用していく方法も考えられますが、それだと他者がつくったフォーム設定にも触れることができてしまうため、運用していくのに非常に不安です。

複数の管理者が、それぞれの独立したフォーム作成機能を持てるような仕組みがあるのが理想だと感じています。

## [kViewer]

### 活用のしどころを整理する必要がある

kViewer(<https://kv.kintoneapp.com/>)についても、フォームクリエイター同様に設定できる点については非常に便利です。

しかし本年度は、地域運営でキントーンを使うというケースでは、kViewerを活用するシーンをつくりだすことが難しく感じました。その原因として、いくつか考えられると思いますので、列挙します。

- ①公開していきたい情報がない。
- ②情報を共有したい相手がキントーンのアカウントを持っているので、kViewerまで使う必要がない。
- ③別途ウェブサイトやSNSもあるので、必要であればそちらで発信している。

といったような理由にまとめることができると思います。

例えば、二条地区で行われている鳥獣対策

の活動に kViewer を使うと、どこで目撃したのかといったようなことを広く住民に周知できるように思われますが、そこまでのニーズはまだ感じません。

①や②についてですが、地域自治組織においても、役員や部会での共有が主ですので、一般住民に公開すべきデータに何があるのかがまだ整理できていません。また、その地域に暮らす住民には公開したいが、地区外の住民にまで知らせる必要がないというデータもあると思います。こうした場合は、kViewer のアクセス制限機能を活用するなどすれば可能になると思いますので、機会があればそうしたケースをまた実践してみたいとも思っています。

今回、匹見町の訪問ケアでキントーンを活用している事例がありますが、その中で、今後「離れている家族にも、高齢者のバイタルデータを公開していく」といったアイデアが語られています。個人情報に関わることでもあるので、議論も必要になるかと思いますが、kViewer の機能としてはアクセス制限を

活用することでこちらも実現が可能ではないかと思っています。

③についてですが、安田地域づくり協議会のように地域住民にアンケートをとり、その集計・分析にキントーンを活用しているケースでは、今後 kViewer を必要とするケースも出てくるかもしれません。アンケート結果を広く住民に公開していこうと思えばキントーンのアカウントに依存することなく、kViewer のような機能を用いてウェブサイトにグラフを埋め込むなどといったニーズもありそうだからです。

こちらについては中間支援組織である私たちがキントーンやその連携機能をどう活用できるのか、という点をまだまだ伝えきれていない部分もあると思っています。







